



鴻文会創立30周年を祝す!

大学構内の桜並木 (本年4月撮影)



第31号
発行・鴻文会

山口大学 文理学部文学科・
人文学部・大学院人文科学
研究科 同窓会

(連絡事務所)
〒753-0831 山口市平井773-2
沖田ビル202
電話・FAX 083-928-4527
郵便振替口座 01500-4-15902
http://
homepage3.nifty.com/koubun/
メール: fycsf998@ybb.ne.jp

目次

《記念特集》の部

表紙
岡光一浩 鴻文会会長挨拶 二頁
丸本卓哉 山大学長祝辞 三頁
湯川洋司 人文学部長祝辞 三頁
同窓賛歌 四〜一頁

辰巳 郁子 溝部 忠増
小田 穰亮 大塚 博久
大野 光生
立川 和正 萩原 正之
濱崎 勢津子 浅野 靖
樋口 敬恭
古賀 信幸 岡村 賢司
中村 雅恵利
会報三〇周年回顧 一二頁

《通号記事》の部

鴻文会、この一年 一四頁
事業・会計報告 一五頁
山大同窓会理事会報告 一六頁
留学生奨学金授与生寄稿 一七頁
人文学部教育職員紹介 一八頁
人文学部学生数 一八頁
学部卒業生・大学院修了生進路状況 一九頁
ご退任教員挨拶・ご新任教員挨拶 二〇頁
人文学部生涯学習事業 二〇頁
最終講義のお知らせ 二〇頁
研究室同窓会だより 二一頁
同窓会の開催に対する助成について 二二頁
鴻文会賛助会員 二二頁
鴻文会会員名簿利用規則 二二頁
鴻文会会則・鴻文会役員 二三頁
鴻文会のホームページ 二四頁
編集後記 二四頁



人文学部の現景



創刊号より (昭和56年)

鴻文会は発足

三〇周年を迎えました



鴻文会会長 岡光 一浩

一九八一（昭和五六）年一〇月三十一日に発足した鴻文会は、今年めでたく満三〇歳を迎えました。山口大学の教職員の皆さま、とりわけ旧文学部文学科・人文学部の先生方ならびに職員の方々の皆さま、そして他学部同窓会や旧制山高同窓会「鴻南会」の皆さまに、さまざまな形で力を添えをいただき、会員の皆さまに支えられながら、鴻文会は三〇年の歳月を経てここまでたどり着くことができました。このことを皆さまに感謝いたしますとともに、皆さまとともに素直に心から喜びたいと思います。

一九八〇年前後と言え、経済が大きな転換点を迎え、人びとがこれからの生き方を模索し始めた、時代の節目にあたる時期でした。大学共通一次学力試験の実施、第二次石油危機、日本のモスクワ五輪ボイコット、県内では県立美術館開館、県庁前のパークロード完成、上関原発計画、山口大学に目を転じれば創立三〇周年式典、シンボルマークの制定、三〇年史発行などの出来事がありました。そうした節目の時期を前にした一九七八（昭和五三）年六月に、文学部は改組され、学生定員をそれまでの一〇〇名から一八〇名へと大幅に増やして、人文学と語学文学科から成る人文学部がスタートしました。日本の高等教育が大衆化し、量的拡充とともに女子学生が増えていった時期でした。



「鴻文」創刊号

その三年後の、翌年初めて卒業生を迎えることとなる一九八一年に、文学部文学科と人文学部の卒業生とそれらの教員、現役学生を会員として発足したのが鴻文会でした。今、手元にはその年の一二月に発行された会報の創刊号があります。B5判の四頁から成る小型のものですが、その巻頭の挨拶で初代会長の和田敏英氏は「（一）文学部同窓会も学部改組の現状に即して発展的に解消され、引き続き、（二）われわれ文学科では、文学科と人文学部とを一本化する新同窓会（鴻文会）がその結成総会において誕生したわけでありませぬ。この（鴻文会）の愛称は、申すまでもなく、山口市の由緒ある鴻の峯にちなみ、大鳥のごとく将来雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会（鴻南会）の一字をも継承することになります」と述べ、さらに「（三）先輩後輩相推して、この鴻文会の発足を機会に、今後ますます親睦の度を深め、社会における連帯を強化し、併せて母校の発展のために一致協力したいと願うものです」としめくくっています。また、その創刊号には鴻文会結成総会、会則、役員名、懇親会、学部教員名、研究室同窓会などの記事が掲載されていますが、それらには新しい出発に際しての期待が躍っているようにも思えます。そうした心持ちをある会員の声は次のように伝えてくれています。「今回の再出発の通知を受けて（待ちもつたり）の感ひとしお。そも同窓会なるものは、それがなくとも生きる上では何の支障もない。したがって誰かが猫の首に鈴をつけるだろう、になり易い。しかし、それがなきに等しいのは物悲しくうら淋しいものだ。実感として年来そう思い続けて来た。それだけに、今回の再出発に（満を持して）の思い入れを持っている。」

そうして三〇年、そのあいだにも歴史はさまざまな盛衰を繰り返しました。バブル景気に沸

いた八〇年代後半、東西冷戦とバブルがはじけて始まった「失われた一〇年」の九〇年代、その半ばには阪神大震災もありました。そして、アメリカ同時多発テロで始まった二一世紀はまもなく、リーマン・ショックによる金融危機に遭遇しました。一方、山口大学は九〇年代後半には大学設置基準大綱化に伴う新カリキュラムの導入や教養部の廃止、創立五〇周年を、人文学部も〇八年には創立三〇周年を、また、鴻文会もそれまでに八回の総会や懇親会を経験しました。そして、その発足にながしのお手伝いをした三〇代半ばの「青年」も、今や二一世紀に入って七〇歳に近い熟年ボーイとなつてしまいました。そうしたさまざまな歴史のありようはこれまでの会報にしかと表現されていますが、初代会長の、「今後ますます親睦の度を深め、社会における連帯を強化し、併せて母校の発展のために一致協力したい」という、鴻文会に対する念願の言葉には、今、忸怩たる思いを隠すことができません。新しい教養の時代とも言われた、好景気を目前にした三〇年前と違って、ますます先行き不安の混沌の様相を増していく社会、近い将来全入時代を迎えてさまざまな変化を余儀なくされる大学、そうした社会の中にある私たちの大学同窓会は、どのように所期の目標にたどり着くことができるのでしょうか。奇しくも今年は東日本大震災やそれに伴う不安定な政治も加わり、社会全体の閉塞感が続く中で、人びとの不安はとどまるどころを知らずうなぎのぼりに増えています。やり場のない斜陽の感覚に覆われているこの少子高齢化の時代を、私たちはどのように生きるべきなのでしょう

うか。

なにも言えない、なにも書けない——そのように、人は圧倒的な喪失感の前にして言葉も一緒に失うものです。しかし、私たちは言葉を紡がなければなりません。言葉こそが新たなつながりを育み、人の心を救うことができるからです。逆境において希望を蘇らせることのできる言葉、それは同窓会が本来発している言葉でもあります。

同窓会には面倒くさがらずにだけ参加しましょう。新しい希望やその発想が生まれてく

るはず

です。

本会報「鴻文」第三一号には、鴻文会発足

三〇周年を記念して、丸本卓哉山口大学長、湯

川洋司人文学部長をはじめ、これまでの歴史を

作っていただいた方々に、ご自身と鴻文会、そ

して大学の三〇周年を振り返っていただくとい

ことでご寄稿いただきました。

（文理第一四回卒・S41・ドイツ文学）



設立20周年記念懇親会での合唱（平成13年）

鴻文会三十周年を祝す



山口大学長
丸本 卓哉

一九八一年（昭和五六年）に山口大学文学部同窓会が発展的解消し、あらたに山口大学文学部同窓会（鴻文会）が発足して三十周年を迎えられたことに対し、心よりお慶び申し上げます。

ところで、今年三月に東日本大震災が発生し、我が国は未曾有の被害を受けました。その復興に向けて山口大学も可能な限りの支援を続けているところですが、全学の教職員、学生及び同窓生、さらに名誉教授のみなさん方には多大のご協力を賜りました。本紙をお借りして厚く御礼を申し上げる次第です。

山口大学をめぐるこの三十年間を振り返ってみますと様々な変化がありました。何といっても大きなものは「教養部の改組」（平成八年）と「国立大学の法人化」（平成一六年）だったと思われまふ。この二つの変革は国立大学の教育、研究や運営の在り方について抜本的な変革を迫るものでした。

法人化後八年目となりますが、変革はまだ「途半ば」の状況です。本学教職員の頑張りによって、教育・研究の質の向上や業務運営の改善、また教職員の意識改革もかなり進んでまいりましたが、まだまだ不十分な状況で、継続的に根気よく改善を進めていく必要性を強く感じています。

一方で、二〇一五年（平成二七年）に、山口大学は「創基二百周年」を迎えます。教職員、学生、同窓生及び地域のみなさん方と山口大学の輝かしい二百周年を祝うとともに、今



後の二百年に亘る山口大学の将来像を確かなものにする教育・研究体制の構築と社会の発展に貢献できるたくましい人材育成を達成したいと願っています。

鴻文会のみなさん方のご発展、ご健勝と本学に対する温かいご理解とご支援を心より祈念しまして「鴻文会三十周年記念」の祝辞といたします。



大学構内

鴻文会創立三十周年に寄せて — インターネット時代の人文学部 —



人文学部長
湯川 洋司

昭和五六年（一九八一）に創立された鴻文会が、満三十周年の節目の年を迎えられたことに、心からお慶びとお祝いを申し上げます。

顧みれば、人文学部は、昭和二四年山口大学発足とともに設置された文学部を改組して、昭和五三年六月に設置され、人文学科と語文学科の二学科から構成されました。その後、昭和六〇年四月には大学院人文科学研究科が設置され、このときに学部と大学院を擁する現在の教育組織の姿が整いました。

平成五年（一九九三）、従来の小講座制を大講座制に変える改組があり、併せてコース制が採用されました。人文社会科学三コース、言語文化科学六コースからなる教育組織に生まれ変わ、広範な学習ニーズに応える体制を整えました。さらに、平成一九年からは、講座とコースの再編を行い、現在に至っています。

また平成一三年四月には経済学部と協力して大学院東アジア研究科（後期博士課程）が設置され、学部・大学院の一貫した教育ができる体制が完備しました。

人文学部の発展は、これまで奉職された多くの教職員の方々のご努力によるものであることはもちろんですが、この学部集った多くの学生のみなさんの研鑽によるところが大きかったと思います。平成二三年三月現在で、人文学部の卒業生は五、五九二名、大学院修了者は二八一名にのぼります。これらの多くの人達が、人文学部の中で仲間を得ながら過ごされたことを思うとき、大学のもつ役割の重要さや大きさを感ずります。今後とも、こうした良き場を変わず提供できるよう、教職員一同心をひとつにして取り組んでまいります。

平成一六年に国立大学法人山口大学となり、従来の国立大学とは制度的にも大きく変わったことに伴い、人文学部もさまざまな改革・改善に努めています。予算の縮小、人員の削減等に迫られていますが、教育の質が低下することのないように心を配っているところです。その一つとして、現在、学部・大学院ともに教育組織とカリキュラムの改編を鋭意検討しております。

大学をめぐる近年の大きな状況変化は、国際化と情報化にあると思います。これらに的確に対応して行くうえで、広報体制の整備はきわめて重要です。平成二二年からは学部ホームページを一新し、とくに受験生や保護者、研究者などの学外の方々や海外に向けて正確で新しい情報を豊かに提供することを心がけています。いまや大学は、大学の知名度などよりも、どれだけ優れた教育を提供できるか、どれだけ質の高い研究を行うか、どれだけ快適な学園生活を用意できるか、といった質の高さが求められています。旧来の国立／私立といった区分は有効性を失い、また大都市圏の大学／地方の大学という区分も、早晚、意味を持たなくなるように思えます。

どういう理念を掲げ、どういう人々を迎え入れ、どのように教育を行い、どのように社会に送り出せるか、そのところを常に点検し考え続けることができる大学（学部）が、その存在価値を高めていくものと思えます。それらを正確に分かりやすく伝えるための手段を持ち、行動することが重要でしょう。まさにインターネット時代の大学のあり方が問われています。

同窓会会員の皆様には、ぜひとも一度、人文学部のホームページにアクセスしていただき、ご感想やご意見、情報をお寄せいただければありがたいと思います。OB／OGとの交流ページも用意していますので、同窓生の交流の場としてもお使いいただければと思います。URLは、<http://www.html.yamaguchi-u.ac.jp/>です。

どうぞ、今後とも人文学部に「ご支援のほど、よろしくお願いたします。

同窓賛歌

紅一点の頃



辰己 郁子

今は昔、大学を出て何年かたった頃、英語学の田中美輝夫先生が、ふとおっしゃった。

「きみは伝説的人物になりかかっているよ。」
母校の後輩たちに、自分がどう評価されているか、いや評価されることがあるとさえ考えていなかったたので、私は返答に窮してしまっただけ。
その田中先生が亡くなられてはや三〇年近い。

今のところ、私はこの世に自分の形骸と認め得るものを保っているから、まあ化石的存在という事になっていくかも知れないと観念している。

終戦後四年が過ぎた一九四九年、私は文理学部一期生の紅一点になっていた。それほどに当時四年制の大学に進む女性は、少なかった。

「もてたでしよう？」と冷やかす半分に聞われることがある。はてどうだったんでしようね。途方もなく貧しい時代であった。主食は配給制で、わずかばかりの米や麦を小鳥のようについで、わすかばかりの米や麦を小鳥のようについで、現在の栄養上の知識よりすれば、良くぞ命を長らえ得た、と言つても誇張ではない、と思う。

テレビや車のある生活は全くの想像外で、思えば当時は、先生たちも学生たちも、よく歩いたものだった。通学の途次、そんな風にお会いして、声をかけて下さった先生たちも、今は、皆、故人になってしまわれた。

当時、学制改革で、旧制の山高から新制の山大に移って来た学生たちの中には、弊衣破帽、朴菌の下駄を鳴らして登校する猛者もいた。私も下駄―当然赤い鼻緒の女下駄―を履いて大学の廊下を歩いていると、突然、事務室からおじいさんのこわい顔が現れて、私は叱られた。

貧しい大学には、女性用のトイレなどあるはずがない、と気付いたのは後の祭。私は、男子学生の放列する背後を小さくなくて、大の方のブースに走りこんだ。明治生まれの母が目にしたならば、さぞかし嘆いたであらう情景！

しかし回想してみると、何と穏やかで静かな時が流れたことだろう。戦争末期のある夜半、米軍機の空襲に曝されて、我が命だけを抱えて逃げまどつた経験の根強い衝撃から、徐徐に解放されて、自分の生き方を手探りする方向へと、己を回らせた年月でもあったであろうか。

諸先生は、チョーサーを、シエークスピアを、またゴルドズワージーを語り、ラテン語を朗誦し、更に古期英語で記されたベオウルフをも取り上げて、英文学の全貌を瞥見する機会を私たちに与えて下さった。

もつとも当時の貧しい現実に根差す私たちの狭い視野は、英文学に登場する多彩な自然、風物についての把握を大いに妨げたと思う。あの窮乏の時代に、ジュリエットの美しい衣装の姿を、一体誰が脳裏にありありと描けることができたろう。ワーズワースの有名な「水仙」の詩の冒頭の一行に、詩情を触発されても、それに続く詩人の歓喜には、私はついていけなかった。

当時、私たちが知る限りの「水仙」は、楚楚と咲く白い、小さいニホンズイセンであったから。詩人の水仙、ダフォディルは、群落をなすラッパズイセンであったものを。後年、豊かになった日本の、花屋の店頭を飾る鮮やかな黄の、大輪の花束を目にして、ああ、これがワーズワースの水仙よ、と納得するのであった。

とまれ五月の光に透けて見える若草を窓外に見やりつつ、長母音の多いラテン語の講義に耳を傾け、はたまたカントタペリー物語に登場する巡礼たちの足取りさながらに、中世の英詩の一行一行を読み進んだあの頃。思えば文学の世界への私の憧憬はこの頃に始まり、それ故に、それは細細と続いて現在の私がある気がする。

惜しむらくはこの私のささやかな気付きを、それとお伝えしたい敬愛する恩師は、もう一人残らず去ってしまったというところ。
(文理第一回卒・S28・英文学)

モンゴルで

日中韓子供キャンプ実現



溝部 忠増

果てしなく広がる内蒙古高原の大草原―、高度千数百メートルの大地、三六〇度にわたつて限りなく伸びる。この地球の一角にあるモンゴルで、二〇〇七年の夏、遊んできた。

八月一日から一日まで日本と、中国、韓国の三カ国合同の国際交流子供キャンプに同行してきた。夜空いっばいに広がるすばらしい星座、しかし、深夜のキャンプではテントを叩きつけるような大雨が降り注ぎ、どでかい稲妻に体が震えるようでした。昼間は、一七度―二七度の好天気、緯度は日本の稚内並み、毎日一〇キロあまりを行進し、キャンプを重ねる足もはずみませんでした。

参加した子供たちは福岡県を中心に、熊本、神奈川、北海道など小学五年生から中学生、高校生まで、それぞれ三カ国入り混じつて七、八人の班編成をし、同じテントで寝食をともにしました。お互い言葉もわからない中で、目と手で語り合い、食事と一緒に、同じように同じものを食べ、昼間は遊戯やダンス、スポーツで交歓を重ねました。

フィナーレは涙で顔がグシャグシャ 私たちを受け入れてくれた北京の宗慶齡基金(育英・社会福祉の組織)の設営・食料・遊戯などが百点で、わずか一日間のキャンプ暮らしでしたが、子供たちは別れ際に互いに抱き合い、涙で顔はグシャグシャ。大人の社会では体験できない素晴らしい国際交流を展開。

この企画を主催した日本側は、福岡にあるNPO法人「遊び塾ありギリス」で、教科書も黒板も、教師もいない学習塾、野外活動で子供たちの心身の発達を目指す小さな勉強会だ。これ

まで中国はもちろん、ネパール、ベトナムなどで国際交流キャンプを重ねてきた。モンゴルでは一六回に及び、今度が最後の機会だということで私(ありギリス顧問)は特にメンバーに加えてもらった。出発前に想像していたとおり評価以上の成果を上げて帰国した。

福岡空港に帰国した子供たちを出迎えた保護者たちは、見事に日焼けしたわが子の姿に目をみはり、自立した逞しい姿をあらためて見直していました。きつと子供たちは、あすの学び方、生き方に表現し尽きない、収穫を持ち帰ったことでしょう。

中国中央テレビの取材を受ける
ところでキャンプ二日目の夕方、西に陽が沈む頃、私は中国中央テレビの取材陣に取り囲まれた。「ありギリスとは何か」という質問だった。そのインタビューに答える前、朝日新聞の中国報道について解説した。朝日は一九七〇年代から「日中関係の正常化」を大きなテーマとして取り上げ、同年三月当時の自民党代議士松村謙三氏を団長とする訪中使節団に、福岡知事社長らが同行、周恩来中国首相と会談した。会見の様子は朝日新聞の紙面に掲載され、中国報道のわが国の嚆矢となった。今年(二〇〇七年)は特に日中国交正常化三五周年。両国の交流を深める様々な事業が各地で繰り広げられている中で、この子供キャンプは実に意義深いものであると強調した。

振り返ってみるとありギリスが交流キャンプに力を入れ始めたのは、福岡教育大山岳部による現場教師の登山隊が二〇年前、天山山脈のボゴ达峰(博克達峰)に登山したあと、新疆ウイグル自治区関係者と話し合ったのが始まり。早速その翌年福岡を中心とするメンバーが天山で第一回目のキャンプを実現した(この時も私は同行)。その後、ありギリスを組織強化、今日に及んでいると述べた。私の話を熱心に聴いてくれたテレビのスタッフ達も、あらためて活動の素晴らしさを評価してくれた。

(文理第二回卒・S29・西洋哲学)

恩師への交々の思い出



小田 穰亮

齢八十路を迎え、人生もそろ／＼終焉期が近づいたという思いをしていた昨今、寄稿の御依頼を受けたことは、山口大学で学んだ者として、茫々たる往時が今更のように思い出されて、懐旧の念に浸っています。有難うございました。

昭和二十四年、各県に国立大学が開設されたことに両親は喜んで長男の小生は、山口大学以外の進学は不可と決められました。入学して最初に教わった先生は、若月保治先生でした。内容は浄瑠璃であったと思います。先生のペンネームは「紫蘭」で由来を伺うと、何も「知らん」からだと言われました。しかし日本で最初にメーテルリンクの青い鳥を翻訳された方と聞いていましたし、学歴も東大の英文科で学ばれ、芥川龍之介とも机を並べ、小泉八雲の授業は大変わかり易く楽しかった。後任の夏目漱石の授業は難解で、気むずかしい性格なので楽しくなかった。卒業後は、雑誌帝国文学で芥川龍之介と共に文学活動をしたなど興味深く、授業の折々の余談で楽しく聞きました。教養課程を終え、専門課程を決める際に、廊下で通りすがりに先生に伺ったら、すくなくとも英文学にしない方がよい。一生かけて氷山の一角をかじるようなものだ。とのお話で国文科に決めました。先生は最初は医者になりたかったそうです。手が大きく腕力が強く、厚い碁盤でも片手で団扇のように持ち上げることができ、こんなごつい手では医者にはなれまいと諦めたと話されましたが、何故手が大きく腕力が強くて医者になれないのか不思議に思ったものです。若月先生著作の浄瑠璃について厚い著書が、当時第三書房と呼んでいた古本屋に陳列し

てあったことが目に浮かびます。

中国文芸の泰斗であった青木正兒先生も、世俗に超然とされた忘れ難い先生でした。東京の書店に先生の著作の全集が整然と陳列してあり、こんな偉い先生が山口のような田舎に居住しておられるのは、何か理由があるのではないかと思っていたのですが、理由は山口の豆腐の味が忘れられないとのことでした。

専門課程で御指導頂いたのは関守次男先生でした。愛称は「須磨の関守さん」。卒業を間近に控え、先生と一緒に万葉歌跡旅行に出掛けました。旅行を終えて大阪駅で解散し、小生は先生と二人で帰山することになりました。しかし店間にパチンコをすることにしました。しかし店に入ったのは小生だけで、先生は窓ガラス越しに、ニコニコ笑いながら小生の負けっ振り眺めておられました。更に時間がありましたので囲碁クラブに入り、初めて先生から囲碁の指導を受けました。卒業後何回か対局しましたが、ほぼ対等に打てるようになっていました。国文科においては、小生は全く不肖の弟子で、レポートでも度々呼び出されて指導を受けました。度重なりとレポートの終わりに「私はこの部門は生来苦手です」とお詫びの添え書きをすると、君は苦手の部門については、変なことわり書きをする、と厳しく注意されましたが目は笑っておられました。

誕生二年目の大学なので、期待と不安が半ばでしたが、名実共に立派な恩師に恵まれ、新鮮な活力に満ちた大学で学ぶことが出来たことは、本当に幸せでした。さいわいにも関守先生の奥津城は山口市にありますので、時折不肖な弟子が在学中にお掛けした迷惑のお詫びをかねて募らせていただいています。

(文理第二回卒・S29・国文学)



草創の頃



大塚 博久

茫茫三〇年、人文学部創設に伴う同窓会組織『鴻文会』発足時を顧みるに、初代会長和田敏英先生の懇望もだし難く、社会学第三回卒の瀧本龍也氏と共に副会長として補佐することになった。奇しくも彼とは旧制中学同期の友であった。『会則』に則り第二回総会は四年後の一九八五年一月二日開催となったが、和田会長外国出張のため瀧本副会長が代って「会長挨拶」を行った。続いて同年四月就任の八木充新学部長(国史学第二回卒)が人文学部・新設の大学院人文科学研究科の現況を報告。記念講演は社会学第一回卒の厚生省人口問題研究所人口政策部長の河野桐果氏の「人口高齢化を考える」と題する、迫りくる少子高齢化問題を抉る話であった。

一九八九年一月一日第三回総会の役員改選で私が次期会長、副会長に有馬正人氏(西洋史学)、森田良吉氏(国史学)の第四回卒トリオが選任された。初代会長和田先生が『会報』第九号に「鴻文会二期八年の歩み」で諸活動を総括され、「とりわけ学内幹事の三氏―岡光一浩教授、添田建治郎助教授、佐々木衛助教授の献身的なご尽力によるところが大きい」と述べられている。研究・教育の本務を犠牲にして、名簿、会報、会計などに過重な負担をこれ以上かけることは許されない。解決すべき第一の課題であった。したがって、私たちはまず地域支部の確立に力を注ぐことにした。幸い研究室毎の同窓組織はかなり充実している有利な条件を生かして、同期会などヨコの連携を強化する具体的な活動を展開することとし、二・三の萌芽もあり、試みもしたが持続せず、力量不足で隔靴搔痒の感あるを免れなかった。

一方、旧制山高同窓会「鴻南会」との関係は同会の開校七〇周年記念大会の決議として本会との緊密化が決まり、小澤太郎会長、山野芳樹事務局長が来学されて、要旨「人文学部が旧制山高を基盤に開設された経緯に鑑み、両同窓会も関係強化する方策を協議したい」との申し入れ文書を頂いた。第四回総会(一九九三年八月一七日開催)の記念講演はパシフィック野球連盟会長原野和夫氏による「分水嶺の日本」であったが、両会初のジョイント企画であり、当日の懇親会には山の鴻南会員も参加され大いに盛り上がった。「鴻南会一七五周年記念大会(一九九四年九月)にはわが『鴻文会』正副会長、『理学部同窓会(のち『鴻理会』と改称)』原田義博会長が招待され、私が祝辞を述べた。

一九九五年七月、鴻文・鴻理両会は、活動拠点を構築すべく模索中であったが、原田会長の尽力で、大学通り沖田ビル内に共同の事務所を開設することになった。内部は会員のサロンとしても利用できるよう設備すると共に、情報化時代に対応してA〇機器も購入し、ホームページも立上げた。

一九九七年(平成九年)八月三日、第五回総会で、新会長に有馬正人氏、副会長に大野光生氏(中国哲学第四回卒)、岡光一浩氏(ドイツ文学第一四回卒)を選出し、委員一九名、監事二名、幹事七名の陣容で発足した。一九九八年(平成一〇年)五月、著名な廣中平祐学長が就任、「超一流大学」構想を掲げ、財政的にも強固な基盤を作るべく「山口大学支援財団」を設立し、二〇〇〇年三月末までに募金目標二億円を達成するとの決議がなされ、各学部毎に組織されている同窓会を「連合同窓会」に統合することとなった。有馬会長はその初代会長に就任したのであった。財政的にも最も弱い「鴻文会」はしばしば会報を通じて募金を訴えた。

『会報』第二〇号(二〇〇〇年一月二二日付)に有馬会長の「募金に一層のご協力を」との檄文を見る。翌年の第六回総会を前に病に倒れ、六年間闘病の末逝去された。痛恨の限りである。

(文理第四回卒・S31・中国哲学)

あの頃、そして今



大野 光生

昭和一九年に中等学校へ入学し、五年後の昭和二四年に卒業するつもりであった人たちは、中学校卒業まで残り一年という昭和二三年四月、突然の学制改革によって、中学四年生ははずなのに、新制高校二年生となった。

山口県の場合、いわゆる高等女学校といわれていた学校で山口高等女学校のみ五年制で、あとは岩国市から下関市までの女学校はみんな在籍四年間で卒業することになっていた。だから彼女たちが四年生となった年に高校二年生に改編され、男女共学の始まりとなった。

当時、山口高等女学校の五年生と、県下全域の中等学校の五年生たちは、いきなり新制高校三年生として扱われ、次の年、新制大学への受験資格が得られたのであった。それらの人達が新制大学一期生ということになる。昭和五年に生まれた人たちである。現在八一歳である。わが山口大学の一期生である。大学というところは就業年限が四年間であるが、八年間在籍可能である。その間いわゆる月謝は支払う義務がある事は今も昔も変わらない。

ところで、昭和五年生まれの人たちで、中学四年生で旧制の高等学校へ進学が可能であった。

世に言う四修の人たちで、旧制の帝国大学へ受験が可能であった。その人たちも、入学後、帝国が消えた新制大学生として卒業して実社会へ出て行った。

昭和八年生まれの私たちが受験して新制山口大学を受験し、入学を許可された時、昭和五年生まれの方々が最上級生だった。四修で旧制山口高校へ入学された方々で、目指していた旧制帝国大学へ入れず、やむなく新制山口大学へ入

られた方々が何人かいた。そうした人達の中には、初志貫徹の心意気を持って、旧制帝国大学の大学院目指して勉学にいそしんでいた。そういう人達と触れ合う機会が私達にもあった。

昭和八年生まれの私は新制山口大学文学部の四期生として入学、旧制山口高校生たちが下宿していた朝倉のある農家の離れの六畳の部屋に下宿し、大学生活を始めた。近くの下宿屋に昭和五年生まれで、しかも四修で旧制山口高校に入ったものの、家庭の都合で帝国大学へ受験しないまま、新制山口大学の一期生となって勉学しているIさんがいた。彼は、文学部を卒業したら東京大学大学院へ入るのだと張り切っていた。新入生として入学した私のところへ現れて、先輩としていろいろとお話ししてもらった。その時、入学記念として新調してくれて、しかもまだ使わずに、部屋の片隅に飾っていた編み上げ靴を見つけると、「東大へ受験しに行く時、貸してくれ」と言い、新品のその靴を履いてみながら、「こいつはええ」などと言っていた。勝手に持ち帰ると、東大大学院の受験に行った。帰ってくる時、靴を返しに来て、「おかげで大学院にパスすることができた。有り難う」と言った時の顔が今でも思い出される。私が一般教養を終えて専門課程の中国哲学科に籍を置いた時、Iさんはどんな履物で上京されたのか、以後消息不明となっていた。時経て、平成二〇年八月、文科と理科の合同同窓会が開催された時、久しぶりにIさんの姿を見つけ、「お久しう」と声を掛けた。すると、「一緒に下宿していたSさんは元気だろうか」と言い、山口での下宿生活を回顧しつつ、ふところから名刺を取り出してくれた。見ると肩書きが「東京大学理学部名誉教授」となっていた。その時、私が七五歳だったから、氏は現在八二歳のはずである。

「懐かしいのお。同宿のS君にも会いたかったが出席されていないみたいだね」と言う。

「消息不明ですわね」と言う。残念だという顔をされていた。しかし靴のことは話題にされなかった。

私たちの入学した頃の文学部の学部長は青木正兒(まさる)先生で、学長は松山基範という世界的な地球物理学の権威者であった。私たちの入学式でも、その後の講義でも、青木先生は羽織袴の出で立ちだった。漢学の泰斗として仰ぎみる先生だった。詩経講読という講義には、他の学部からも教授、助教、講師という肩書きの方々も私たち学生に混じって受講されていた。私たちは松山学長のことを陰で「引力で飯を喰っている人だ」などと噂していた。

後年、私ははからずも新制山口高校の教諭として籍を置くこととなり、当時の校舎や鴻南寮は姿を消してしまっていたが、入学式のあった旧制山高の講堂はそのまま記念館として残されていた。

放課後、生徒たちと外庭の雑草をむしりながら、ここが山口大学文学部の発祥の地であったことを語って聞かせたものだ。私は山大を出て、四〇年近く県下の公立高校の教員となり、最後に「青春乱舞の地」という碑文のある新制山口高校を職場として教員生活を終えたことをえにしに不思議だと思わないではいられない。

一五年戦争後、民主主義の名の下に、身分制助長の元凶の場であった帝国大学が解体され、新しく学問の府となった山口大学で学んだ一人として思うに、学制改革にしても、独立法人としての大学運営にしても、すべからずモデルというものが何一つなく、だから好き勝手な大学運営がなされるという無為無策の中で、効率性のみを求める産・学共同の府となってしまうていることにいささか憂慮しているひとりでもある。本来、大学というところは、斬新で、最も信頼のおける情報源でなければならず、地方にあつて、中央にない唯一の司令塔でなければならぬ。地方大学の強みはそこにあり、法人化によって地方大学は消滅するのではないかとこの危惧を抱くのはまさに杞憂に等しく、山口大学は東京大学の次に古い歴史のある大学だという奇妙というより、全く意味もなく、何のために役立つのかも分からない歴史的事実を根拠に据えて記念行事を企画するなど、センチメンタリズムの最たるものでしかないという気がする。

そも、大学の矜持というのは、古さではなく、新しさなのだという自負が欲しい。最近の情報では、医学部の活動実績が日本一であったとか、獣医学で山大と鹿児島大学との農学部が薩長同盟を組んだというニュースの方が同窓生としてはるかに嬉しいことである。さすが現学長は土壤学の権威だということが実証されたような思いがしたものだ。母校が新しい土壤の上にそびえ立ち、ますます発展することを心底祈るものである。

(文理第四回卒・S31・中国哲学)



旧制山口高校の講堂「誓幹堂」

虚業の世界から



立川 和正

五〇年、半世紀といえ、もう時代を隔てるに十分な年月。もう私の学生時代とは別の時代なのだ。

山を卒業してそれだけの星霜を経ているのだから、既に鬼籍に入っていて不思議なし。まあ生きてはいるが、どうやら物の怪に近い存在と自認している。その物の怪の語りのことを物語りというのだから、この文も回想というより、もう物語なのだ。

大学を出て、実社会を走り回っている間は、山大のことはほとんど意識してなかった。魑魅魍魎、虚実混淆の世界で、自分自身も保護色を身につけて生きるのに精一杯だった、と言っておこう。

五〇歳になってから自分の事情が変わって、それまでの実業の世界と決別して、虚業の世界に転身した。つまりは会社経営をやめて宗教の世界で生きることになったのだ。

私は宗教を虚業と見、そこに徹しようと心がけた。早い話が実業の世界というのは稼ぐ仕事をする世界、儲けてなんぼの世界である。その世界で私は損ばかりしていた。つまりは世渡りが下手くそであったのだ。その下手くその原因の一つは、大学でかじった哲学、倫理学にあったと思っていた。大して勉強した訳でもないのに、変に「まじめ」で思い切ったことが出来なかった。こんな考えは、哲学に難癖をつけて自分をごまかしていたに過ぎない、と年と共にわかってはきた。

私は、宗教の世界を虚業の世界、と決めつけて身をおいた。つまりは、儲けてなんぼの価値基準とは別の物差しを持つ世界だとしていた。

虚業の世界とは何か。保身や打算とは無縁の生きざまのことであり、真実をこそ基準に生きることである。

：私のなかで、またぞろ昔の哲学・倫理学がやらのさばってきた。しかし、宗教界のありのままも、決して美しい真実の世界だといえない、とだんだん実感するようになった。それどころか、哲学・倫理学を借りて、自分の正味のありようを誤魔化そうとしている自分に気づくようになった。口先ばかりのソフィストになってゆく自分をみて、いい気持ちが出なかった。

結局、宗教界もふくめて、世の中はソフィストが横行している。自分もその範疇のなかにいる。まさに末法の世か、と釈然としない時を過ごしていた。

三月十一日があった。

私のきれいな哲学は木端微塵に砕かれた。呆然とした日時を経て、私は若き山大時代に一種の本卦還りをしたような思いになった。ただ若さと未経験だけがあって、実業虚業の区別も全くなく、ひたすら未知の世界にあって、知を愛し、ぼやーと過ごしていた。五〇年前の私の山大時代に回帰して、そこから本当の自分らしさ、人間らしさが得られ、またあるべき世の先行きが見えてくるように思えてならないのだ。

(文理第八回卒・S35・西洋哲学)



五重の塔 山口市瑠璃光寺

五十年前の通学定期乗車券



萩原 正之

残暑の厳しい中「つくつく法師蟬」の鳴き声、夜は「くつわ虫」のにぎやかな音、お盆が過ぎて一年で最も心身ともに安堵感を味わう季節である。

小学校二年の小僧の時から、古稀を過ぎた今日まで、隠居の身とは云え、お盆参りは大変である。今年もは任職、孫二人と、三世代四人での務めで、老体の私は比較的楽であった。

今、のんびりと甲子園の高校野球をテレビで観戦しながら「鴻文会」の会報の原稿に取り組んでいる。

大学時代の記念物、大切に所持している物。文学部学生便覧。開封無効の押印された封筒の中の「卒業証明書」、「学業成績証明書」、「山口大学柱島民俗調査団」の記章。(山口)小倉 間の「通学定期乗車券」。

何れも学生時代の記念の品であり、苦業の思い出のこもったものである。その中でも私にとっては「通学定期乗車券」が大切なものである。

昭和三十七年三月九日迄一ヵ月間、(小倉)山口)間の国鉄通学定期券、料金は一、二三〇円、学生時代最後の通学定期券である。

昭和三十六年三月一日、三年生の後期試験が終了した日、一年先輩の国史専攻生が卒業論文審査を終了した日で、我々三年生と四年生合同の親睦会を夕方から開催する事になっていた。下宿先の小郡町柳井田バス停から山口市営バスに乗車し当日の会場近くの県庁前で下車した時、同級生二人から下宿先の電話連絡で父の死亡を知らされた。

三年生の終了と父の死亡、昭和三十六年三月一日であった。

六人兄弟姉妹で、姉三人、四番目の長男であり、護念寺の住職を継承する事は幼少時より納得していた。

宗門の大学(西山短期大学)以外の出身者は住職資格を取得するため、夏休み中に開講される「検定講習」を一週間、総本山光明寺、西山短期大学で受講する事になっていた。そして二カ年受講し「検定試験」に合格し、「加行(けぎょう)」「(春休み中二週間)を修了しておれば、大学卒業と同時に住職資格が取得できる事になっており、この事を十分承知の上で山口大学文学部文学科に入学し、二年生進級で希望通り国史専攻生になった。

国史学生は夏休み中に松岡先生指導のもと歴史、民俗調査に参加していた。二年生の時は「国東半島」、三年生のときは「萩市見島」、何れも「検定講習」のため、不参加であった残念な思い出がある。

四年生の時、岩国市「柱島」の調査には寺の法務をやり繰りして参加できた。四年生の一年間は学生と寺の法務との掛け持ちで、土曜日に寺に帰り、法務をこなし、水曜日に下宿に帰り、山口線(上郷-山口)を通学定期券を使って通学した。

昭和三十六年是我々念仏宗門人にとって重要な年であった。宗祖法然上人の七五〇回大遠忌法要の年である。戦後一六年、人々の生活は貧しく安定してなかった。

「一生に一度本山参り」と「伊勢参り」という時代であった、五月に檀信徒三〇人余を引率し長岡京市の総本山光明寺に参詣した。

五〇年を過ぎて今年も法然上人八〇〇回大遠忌の年であり、老隠の身ながら、檀信徒三〇人余と四月に大要に参詣する事が出来たこと歓喜するのみである。

年相応の健康に恵まれていることに感謝し、「民生委員、児童委員」と「人権擁護委員」の仕事に余生を捧げたいと思う。

(文理第一〇回卒・S37・国史学)

青春の血を滾らせた日々



濱寄 勢津子
(旧姓 寺田)

昭和三十七年四月、紺のスーツに身を包んで私は山口にやってきた。母が高校の制服を仕立て直してくれたものだった。季節は移ってキャンパスはすっかり春の装いで、私もようやく心を開いてこれからの日々に思いを馳せる気持ちになつていった。

私の故郷は玖珂である。今は岩国市となつたが、岩徳線の中程にある町だ。山口と同じで、夏は暑く冬は底冷えのする盆地だ。休みになると私は、米屋町の停留所からバスで防府まで出て、山陽本線で徳山に降り、更に玖珂までは岩徳線に乗り換えた。そして実家のある瀬田まで再びバスに乗って帰省した。卒考を越えた母の下に、今は車で一時間と三〇分で里帰りすることを思えば、あの長い道中、何を思い何を考えながら帰つたらう、と五〇年前を振り返る。

国文の研究室は、今の県立図書館の辺りだった。板張りの廊下を足繁く行き来した記憶がある。卒業後もずっと山口に留まることになった私は、十八で後にした故郷よりもはるかに長い年月を、この地で過ごしてきたことになる。

入学当初は、大殿の龍福寺の近くにあって女子寮から大学に通つた。六畳の畳部屋に、二回生を含む四人だった。人付き合ひの苦手な私は直にそこを出て、一の坂川沿ひの家に下宿した。新築で、汚すまいといつも気を遣つた。夏には河鹿が鳴き、朝と夕には、ザビエルからの悲しい旋律が流れて郷愁を誘つた。しかしこゝも窮屈になり、数ヶ月も経つと、五重塔のある瑠璃光寺の下宿に移つた。今のように観光化しておらず、鄙びた回廊や池の端をホタルが悠々と飛んだ。方丈に頼まれると、本堂の拭き掃除なども手伝つた。大学へは香山公園を抜け

て、今のパークロードを下つた。

関守先生や関先生の講義を思い出す。しかし、今でも忸怩たる思いになるのは、自分は決してよい聴講生ではなかった、と自省も込めて振り返るからだらう。入学後すぐに文芸部に籍を置いた私は、同人誌「山下文芸」に盛んに小説を書いてきたが、そのうち学生運動に心を奪われるようになり、しだいに講義を疎かにするようになっていった。後年になり、三人の子育てを終えた三四歳の時から、高校の講師を三〇年近く勤めることになったが、その時になって初めて当時の不勉強を痛感し、両先生の面影を偲びその温情に瞑目して低頭する気になつたのだ。

山口大学の思い出は、いつも愛惜の念と共に蘇ってくる。そして今にして思えば、その軸となつてきたのが学生運動と文学、そして恋、この三つだったらうか。当時のキャンパスには、青春の血を滾らす自由奔放な空気が満ち満ちていたように思う。全くの田舎娘だった私は、忽ち、先輩達が説く運動の理念の虜になり、何の疑いもなく活動にのめり込んでいった。すると、何の屈託もなく書いていたそれまでの作風に、徐々に社会性を帯びた一筋縄ではいかないものが加わっていった。そして何よりも、動きが取れないまでに焦がれた恋の感情は、運動と創作とを巻き込んで、全精根を使い果たすまでの自分との闘いに突き進んでいった。こうした正に青春の結晶とも言えた三つ巴の様相を、卒業までどのように收拾していったのか、いつかは形にしてみたいと思つてきたが、数年前私は、その当時をも含めた自伝を小説にして書いた。そしてつい最近、それを「生（いのち）」の軌跡」と題して自費出版した。ここにこうした紙面を頂いた時、私は心から有難いと思つた。あの山大で過ごした四年間は紛れもなく、若さに任せて以後の人生を懸命に模索した時代だったのだ、と改めて思わせて頂けたからである。

(文理第一四回卒・S41・国文学)

思い出の味



浅野 靖

卒業して早三〇年になるが県内で働いていることもあり山口大学は今も身近な存在だ。大学近くで自転車のペダルを漕ぐ学生の姿にかつての自分をオーバーラップさせる。

バドミントン部に所属し体育館でシャトルを追っていた。人文学部所属だがもっぱら「大学ではバドミントン学部」と称し、その通り学業への情熱はほどほど(それ以下?)だったのが今となつては恥ずかしい限りである。教養の一年時には体育館と学生食堂にしか通つていなかったような気がする。体育の授業でサッカーを楽しんだ後は第一学食でカレーライスを注文するのが常だった。当時、一〇〇円か一二五円だったかと記憶している。肉片を求めてスプーンを操るがなかなか見つからず、これだと思つて口に入れたら溶けきれないルーの塊だった。

学生時代の思い出の味は「春來軒」のばりそばである。JR山口駅の近くに間借りしていたが、圏域にある「春來軒」「万両」「番茶」の三店が胃袋を満足させてくれる食のトライアングルを形成。なかでも道場門前のアーケード西口から出たところにあった春來軒には週三回は通つていた。決まって大盛りをオーダー。独特の揚げたそばがキャベツやキクラゲ、タケノコなどの野菜と一緒に大皿に山のように盛り出されてくる。銀さじでスープをすくいながら最初はそのまま箸を進める。少し味に飽きてきたら胡椒、さらにはラー油をかけ味のバリエーション豊かにメニューを堪能する。至福の時間が流れる。山大に進んだおかげで出会つたソウルフードは、体中に食材の滋養と充足感をもたらしてくれた。

今でもたまに、ばりそばの店に立ち寄る。あ

の時と同じ味が舌先で探り、若かりし頃に思いをはせる。くたびれた心もニュートラルな時代にリセットされ再び前に進み出す。思い出の味にはそんな効用がある。

学生にとつて就職は大きな関心事の一つだが最近の経済情勢の厳しさはいかばかりか。景気の波に二十歳そこそこの若者が乗った小舟は翻弄される。樫野川を下り大海に舟を漕ぎ出したが、今回のうねりはその比ではないのかもしれない。人口減が経済を縮小させる、の説もあるが、もはや穏やかな海をあてにする好不況というサイクルすら期待できない。

IT化、グローバル化そして三・一一大震災が引き起こした原発事故が、求めてきた効率性が長い目でみて果たして割に合つていたか、そんな社会が幸せだったのかを問う。大海はさらに広がりを見せ、混沌の度合いを増す。

大学入学と同時に就職などと耳にすると、大変な時代だと痛感する。多様性を許容するのが成熟した社会を育むのであれば、右向け右で同じ価値観を強いられるのは、どこか寂しい気がする。「大学では自分のやりたいことと出会つて」「好きな道なら苦労も苦労とは感じないよ」の思いである。

不勉強をかこつていたが、卒業論文で取り上げたE・イヨネスコの『禿の女歌手』の解析で、本来なら時系列で進行する物語が、舞台上出てくる時計が進んだり後戻りしたりするのは作者が不条理を表現している証し、と指摘し担当のS先生から「いいところを突いているな」というような言葉をいただいた。ほめられるのは悪い気はしない。スポーツも、味巡りも、そして学問も「大学は楽し」なのである。

山口の市街地に行くのにわざわざ平川の道を迂回して車を走らせるのは案外とこの空間が居心地が良かったからに違いない。

(人文第一回卒・S57・仏語仏文学)

大学を卒業して
三十年目を迎えて



樋口 敬恭

昨年十月、中国の大連工業大学服装学院の四回生を対象に、旭化成AGMS株式会社主催のパターンメイキング(型紙作成)の特別セミナーを実施し、私は社長として、修了書を授与してきました。ちなみに弊社は、アパレルの企画設計部門や縫製工場向けに型紙作成ソフト(CAD)や縫製仕様書作成ソフトを開発して日本だけでなく中国にも多く販売しています。

現在の中国拠点としては、大連、上海、広州、香港です。振り返ってみれば、中国とのかかりは、人文学科東洋史研究室で中国政治史を専攻して以来、約三十年になります。今の仕事は中国との取引が多く、不思議な縁を感じています。

四年生のときに、「日中合弁企業の今後の行方」のフォーラムを聴講しましたが、そのときに受けた中国に対する考え方は、この三十年で大きく変わりました。中国は、国営中心から民間中心になり、GDPでは日本を抜き、世界のマーケットに変貌を遂げたのです。

大学時代は、専門書は別として三国志や論語、魯迅でしたが、今では中国での増値税制度や労務管理制度、知的財産権等ビジネスに関係する読書が多くなっています。

学生にとっては少し高価な、大漢和辞典を購入し、課題が有るたびに、夜遅くまで孤軍奮闘した日々が思い出されます。一見、大学の勉強が専門的に役に立たないように思われがちですが、資料を選び、通読し、分析し、考察し、纏めていくことは、仕事の進め方に大いに役に立っています。

大学は、学びの場所でもありますが、人と出



横浜にて

会い、恩師との出会いは大きいと思います。

畑地先生(当時研究室教授)との出会いは、私の人生にとって大きな出来事でした。先生からは、学問の取り組み方から、人生とはなにか、又企業人とはなにかを教えられました。学生時代は、休みの日は、先生のお宅にお伺いして奥様の手料理に舌鼓をうちながら夜遅くまでお話もさせていただきました。懐かしい思い出です。

三十年経っても畑地先生ご夫妻とはお付き合いさせていただいており、昨年、畑地先生ご夫妻が所要で東京にいられたので、神崎氏(人文四回卒、研究室での我が名幹事)と一緒に横浜をご案内しました。スナップ写真は左から神崎氏、畑地先生ご夫妻、私です。先般いただいたお手紙では、中国人との付き合いで重要なのは信と義を重んじており、至誠の心が大切で、相手のことを自分のことのように思っ接すれば、うまくいくとのアドバイスをいただき、今後のビジネスの糧にしていきたいと思います。

この十年間、仕事で訪れた街は数多くあり、上海、北京はもとより、大連、青島、寧波、南通、無錫、成都、安徽省合肥、厦門、広州等(桂林、黄山、万里の長城、九寨溝はお薦めス

ポット)など数十箇所訪問してきました。北京が政治的な色合いが強いのに対して、上海はファッションの街です。

特に、上海万博前は、若い人を中心に、おしゃれな洋服へのあこがれから、実際に着て楽しむというスタイルに変わり、縫製工場も、単なる下請けから自ら企画、設計し、そのレベルは、日本の技術レベルと比肩するまでになりました。

多くの日本の技術者が、中国に単身赴任している現状をみるにつけ、日本の将来を心配していますが、日本と中国との協業が大切であり、材料費高騰、人件費高騰、人手不足を解消してどのように生産体制を進めていくかを問われています。我々のような生産財の提供者は、その架け橋となり、日本と中国との関係を越えてアジアという側面からとらえて拠点を作っていきたいと考えています。

最後に鴻文会三十周年を迎え、OBも各界、学校や学会、マスコミ、企業等でご活躍されていると思います。紙面を通じて、皆様のご活躍ぶりを拝見し、昔の山口を懐かしみ、ご尽力さされている方々に敬意を表しつつ、鴻文会の益々のご発展を願っております。

(人文第一回卒・S57・東洋史学)



一の坂川

文芸作品募集

自作の俳句・短歌・詩・川柳を

会員の方から自作の文芸作品を募集します。部門は、

- ①俳句
- ②短歌
- ③詩

④川柳

です。既発表の作品でも結構です。

作品の数は指定しません。作品とともに大学時代からの文芸志向のエピソードや現在までの作歴や精進ぶりなども含めて、ご自身の解説や回顧を添えてください。

タイトルと氏名と卒業年次、それに顔写真を合わせて一〇行。また顔写真以外にスナップ写真をプラスされるのであれば一枚限りで一七行分をさらに充ててください。

以上のタイトルや写真などと作品の行数、それに解説の行数を全部合計して八二行以内、ちょうど半頁(二段〇二行)に入り切る分量とします。本誌一頁の募集要領に準じます。併せてご参照の上ご応募ください。



大学構内に咲く紫陽花

学生時代の思い出と 恩師中村友博先生のご退任



古賀 信幸

私が、生まれ育った北九州・門司の地を離れて山口へ移り住むこととなったのは、今から三〇年前の昭和五六（一九八一）年四月、山口大学人文学部への入学がきっかけでした。この同じ年の秋に、鴻文会が創立されています。

最初の年、私は矢原駅の近くにある賄いつきの寮に入りました。海に面した北九州の比較的稳定やかな気候とは異なり、夏は暑く冬は寒い盆地特有の山口の気候に、戸惑いを感じながら過ごしました。

学部にあがり考古学を専攻しはじめた二年目から、私は秋穂渡瀬橋近くのアパートに移り住みました。考古学の研究室では、近藤喬一先生と中村友博先生のご指導のもと、遺跡調査や出土品の整理、調査報告書の作成や図書の受入、酒盛り？などに明け暮れていました。卒業までに就職が決まらなかった私は、その年に新設された大学院人文科学研究科（修士）へ進学しました。大学院の二年間は、引き続き近藤・中村両先生にご指導いただきながら、後輩と洋書の輪読をしたり、遺跡調査のアルバイトで得たお金の一部を資金に「Relics（遺物）」という研究冊子を発行（残念ながら三号雑誌となりました）したりと、大変充実した時を過ごしました。

そして、大学院を修了するタイミングで、山口市がはじめて文化財専門職員を採用することとなり、その試験に運よく合格した私は、それ以来二五年間、山口市役所に勤めています。入所して一五年間は教育委員会で大内氏遺跡の調査などを担当し、今は市史編さん室で事務局の仕事を担当しています。

さて、鴻文会の創立から三〇年目となる今年、正確には今年度末ですが、在学中からいろいろとご指導いただいている恩師・中村友博先生が定年を迎え、大学を退任されることとなりました。

中村先生は、昭和五七年の四月に、助教として奈良国立文化財研究所より着任されました。初対面の先生は、もみあげから口まわりへ周囲する黒々としたりっばな髭と黒縁めがねの奥の涼しげな眼差しが、とても印象的でした。昨今、髭には白いモノも多くなりりましたが、印象的な風貌はいまだに健在です。

学部にあがった最初の夏休み、近藤先生と中村先生の引率のもと、私たちは熊毛町にある松尾遺跡へと、測量調査の実習に出かけました。まだ測量機器の扱い方に不慣れであった私たちに對して、中村先生は、しょうがねえなあーを連発しながらも、何度も丁寧に測量機器の扱い方を教えてくださいました。今思えば大変ありがたく、また懐かしい思い出です。

この度私たち考古学研究室の卒業生は、お世話になった恩師・中村先生の退任に際し、学内の関係者有志とともに「中村友博先生退任記念事業会」を組織することにしました。記念論文集の献本、最終講義、記念祝賀会などの行事を企画し、現在その準備を進めています。中村先生の退任に際して、卒業生を中心にお世話になった者が山口へ参集し、先生の学思に対する感謝の想いを届けたいと考えています。

最終講義は、平成二四年三月三日（土）に、大学会館ホールでおこなわれる予定です。多くの皆さまの来場を、お待ちしております。
（人文第四回卒）

第一回院修了・S62・考古学



独文の思い出は 岡光先生とともに



岡村 賢司

私が大学時代を思い出す時には、多くの友人や先輩・後輩とともに、必ず岡光先生のお姿が浮かんできます。

私が人文学部のドイツ語ドイツ文学研究室（以下、独文）に入ったのは平成四年の四月でした。現在鴻文会の会長を務めていらっしゃる岡光一浩先生は当時、文部省の研究者としてウーイン大学におられ、山口大学に帰って来られるのは後期からだということでした。先生のお人柄や研究室での様々なエピソードを先輩から聞けば聞くほど早くお会いしたいという気持ちが強まってきました。やがて後期が始まり、先生も独文に戻って来られました。そしていよいよ先生との初対面となるわけですが、確かその時は残念ながら何か良くないこと（宿題をやっていないといったような類のこと）をして、そのことを謝するというシチュエーションでした。ひどく叱られるだろうと覚悟して身構えていたのですが、岡光先生は、「おお、君が岡村君かあ、わははははは」と豪快な笑いでそれを許してくださり、拍子抜けしたのと同時に、なんだかとてもない魅力をもった先生だな、と思ったのを今でもはっきりと覚えています。

そのような先生との出会いから独文での生活はますます楽しさを増していきました。それは、個性豊かで仲の良い独文の仲間はもちろんのこと、研究室に集まってバカ話をして盛り上がっているその隣の部屋で私たちを見守ってくださっていた岡光先生のおかげです。岡光先生は本当に学生の面倒を良く見てくださいます。先生の素晴らしさは本来ドイツ文学の研究者としての偉業をもってして語られるべきなの

ですが、当時学間に余り熱心でない学生だった私にとっては、様々な企画で学生を楽しませてくださった先生との楽しい「遊び」の思い出しか語ることができません。

先生はみんなでお酒を飲むのが好きで、定期的な独文の飲み会だけでなく、研究室で先生を交えて夜遅くまで飲み明かしたこともありました。また、当時多くの研究室が行っていた「卒論中間発表」を一泊二日の合宿形式で行うのが独文の恒例でした。昼間は先生も学生も難しい顔をしてあれやこれや学問の話をしますが、夜は大宴会になり、岡光先生はいつものように「わははははは」と楽しそうに笑いながらお酒を飲まれました。

また、先生はアウトドアにも積極的でおられました。よその研究室とソフトボールの対抗戦をしたり、突然「明日方便山に登るぞ」という指令を受け、眠い目をこすりながら東方便山に登ったこともありました。

そして何より思い出深いのは、卒業式の日です。私たち独文の卒業生は式後に先生のお宅に招かれ、ごちそうを振る舞っていただいたのです。本来私たちが先生をお招きして謝恩会を催すべきなのですが、最後の最後まで私たち学生のことを大切にしてくださいました。

当時は考えたこともありませんでしたが、先生は、研究や講義、そして大学の仕事で非常にお忙しいのにもかかわらず、私たち学生に多くの時間と労力をさいてくださっていたのです。このことのありがたさが社会人となった今ではしみじみと良く分かります。現在、私は高等学校で教員をしています。私が教員として一番大事にしていることは、「生徒あつての教員」ということです。生徒が学校にいる間は、生徒がいなくてもできる仕事は後回しにし、少しでも多く生徒と触れ合うようにしています。現在の私の教員としての在り方の原点は岡光先生だったと言えます。数々の楽しい思い出をくださったことともに、この点でも深く感謝しています。本当に、どうもありがとうございます。

（人文第一回回卒）

第二回院修了・H10・独語独文学

第二回院修了・H10・独語独文学

十年を振り返って



中村 稚恵利 (旧姓 前田)

私が大学を卒業してちょうど十年の月日が流れました。大学卒業後は地元のカールテレビル局に就職。地域に密着した放送機関ということもあって、山口大学の教授や学生との関わりが多々あり、卒業後も大学内の様子を見ることができました。

学内で行われている研究やフィールドワーク、公開授業など、学部はもちろん立場や世代を超えて、あらゆる方々のお話を聞いたこと、時には共に仕事ができただけで学生時代とは違う視野で山口大学の魅力を発見できたように思えます。

すると、自分は学生時代の四年間をうまく活かしていかれたかという考え、戻らない時間を惜しんでしまうのです。もちろん、自分なりにその時にしかできないことに挑戦し、得たものもたくさんありますが、あの日々あれもやっておけばよかったなど、いろいろな欲が出てきてしまいました。

何か一つのことについて学べることの幸せを、時間がなくなると改めて気がついたのです。

「大学での四年間を大切に。人生の中でこんなに自分がやりたいことをできる時間はないよ。自分次第で変わる四年だよ。」

大学入学前に、高校の先生にいわれた言葉です。最近ではその言葉を、学生さんと話をする機会があると、学生さんに言うようになりまし

た。「今ある時間を大切に」と。結婚後は退職し、しばらくは子育てに追われる日々でした。

「子育て」にはこれまでに経験したことの無い楽しさや感動がありました。しかしそれと同じくらいに悩むこともあり、自分の精神的な未熟さに気がつかされる毎日です。

一年、二年と過ぎていくにつれ社会から離れているなんともいえない孤独感、焦りも感じるようになりました。自分に自信がなくなっているのです。

大学周辺に住んでいるので学生たちの姿をみながら、ふと楽しい大学時代のことを思い出すこともありました。豊かな木々に囲まれた校舎、テニスコートやグラウンドで部活動に励む学生たち、十年たっても変わらない光景を見ながら、自分はこのころから何が成長しているのか、これから私がやりたいことはなんだろう、と考えていました。

私に家事・子育てをしながらバランスよく仕事ができるのだろうか？不安な気持ちを持ちつつも、母ではない「自分」になる時間を作ることを決め、昨年復職しました。自分にとっては大きな一歩。久しぶりに社会とのつながりが持てたことは大きな変換となり、不器用ながらも妻の顔、親の顔、職場での顔、いろいろな自分を使い分けながら現在暮らしています。

時間に追われる毎日ですが、さまざまな立場を持つということは責任も、学ぶこともたくさんあります。そう、今は生活の中で日々学んでいるのです。

学生のころのように何か一つのことについて没頭できる時間は少なくなりましたが、今は今しかできないことをやっているのだ、と自信を持って毎日を楽しめればと思っています。

これまで以上に周囲の人々の協力に日々感謝することを忘れることなく。

(人文第二〇回卒・H13・言語情報論コース)



原稿募集★投稿要領

わが学窓・同窓・近況を

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によっても会誌の編集を進めます。ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をまず募集します。

要領は次のとおりです。

- (一) 本文の書式はタテ一行二文字とし、分量は全七二行以内とする。
- (二) これとは別に
 - ①タイトル
 - ②氏名
 - ③自身の顔写一枚(を必ず載せる)を文頭に置き、
 - ④文末に卒業序次・卒業年・専攻を必ず



雨の日の大学祭「姫山祭」

- (三) 顔写真以外にスナップ写真を掲載したい場合は、一枚限りとして、一枚につき本文の行数を一七行ほど削減すること。
- (四) 掲載は全体で半頁(二段)組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。
- (五) 半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- (六) 行数が足りず余白を生じた場合は、その余白に応じて編集部の方でカットもしくは大学構内の風景写真などで埋めることがあります。
- (七) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- (八) 以上、既刊第三二号の「同窓賛歌」の四・五・七・八・一〇・一一頁を参照のこと。
- (九) 原稿は返却しません。写真は返却します。
- (一〇) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- (一一) 送稿先は当会事務所内、編集部宛。
- (一二) 締切りは、毎号とも六月末日とします。

会報「鴻文」誌面による三〇周年回顧 いまなお共有したい 「鴻文」の意気揚言

創立三〇周年を機に、これまでの会報「鴻文」(年刊)を見返し、そこから「いまなお伝え」「引継ぎ共有する」意気・揚言・情報・こぼれ話をつかみなおし、三〇周年回顧への賛歌伴奏とすることとなった。

ところが、手をつけてみると「同窓会定義」論だけでも、割当て紙面をたちどころに越える勢い――。

「学生生活」「山口街点描」「学園紛争」「就職支援」「学術文化」「国際交流」「住所不明者」「研究室同窓会」「地域同窓会」などなど、追っかければ、それまたそれで、それぞれテンコ盛りとなる。

今回は手初めにアラカルト版。願わくば連載「三十余夜物語」の初編とでも見なしていただき、続編、続々編へとリレーしていくのも一興かと――。

なお、引用文中の「……(中略)」は、いずれも編者による措置。(編者 北川 健)

■第一話

鴻文の「鴻」とは将来雄飛の大鳥

会名「鴻文会」の「鴻」とは何か――。

『鴻文』一号(S五六)で初代会長和田敏英氏が、命名の意義を述べている。

「山口市の由緒ある鴻の峯にちなみ、大鳥のごとく将来雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会『鴻南会』の一字をも継承することになります」

「鴻の峯」とは、山口街の北西に位置する高さ三三八メートルの山。

鴻南会は、鴻文会の「前身母胎」だとして、「旧制山高、文理学部文科学科、人文学部、三者の接点にある者として……」

という立場で、会長就任の辞を告げている。

■第二話

人文学部の発足を画期に鴻文会結成

鴻文会の直接の前身組織は「文理学部同窓会」である。

その文理学部同窓会について、『鴻文』一号(S五六)で初代会長和田敏英氏が、就任の辞で大略、次のように述べている。

昭和二十八年(一九五三)に第一回の卒業があり、その翌年に結成。つごう六回に及んで同窓会名簿や会報の発行、寄付事業を続けてきていたが、

「前身母胎たる旧制山口高等学校同窓会との合流問題も進捗せず、やがて昭和四十一年の教養部創設やそれに続く大学紛争の影響を受けて、まったく停滞……」

それが、昭和三十三年(一九七八)の人文学部への改組を踏まえて「多年の宿願」が果たされた――と。

ちなみに、結成総会の出席者は一六八名。

■第三話

鴻文会の前身母胎、旧制山高の鴻南会

鴻文会の前身母胎とされる、旧制山口高校の同窓会「鴻南会」について、『鴻文』一三三号(H五)で同会事務局長の山野芳樹氏が述べている。

「大正八年発足の旧制山口高等学校は、昭和二十四年学制改革により山口大学文理学部として発足することになり、爾来鴻南会は後を継ぐ者のいない同窓会となりました」

「高等学校と大学の文理学部には制度的関連性があり、一時期両同窓会の連携が考えられたこともあったようですが、いろんな事情から成功しなかったようです」

「しかし、鴻南会が大学内に事務局を置くことが許されてから、……平成二年六月には鴻南会より鴻文会及び理学部同窓会宛に……文書が出され……何か共同事業がやれたらということになり、……鴻文会総会における記念講演会の実施となりました」

■第四話

旧制山口高校との制度的関連の具証

前身母胎「鴻南会」との連携について、特別会員(元学部長)の渡辺真治氏が、『鴻文』一三三号(H五)で前掲の山野氏に続いて次のように述べている。

「この総会には、旧制山口高等学校同窓会『鴻南会』会長の小沢太郎氏と幹事の山野芳樹氏が出席され、……『鴻南会』と『鴻文会』の間の連携が緊密化しつつあることの証左であります」

「このことは、昭和二十四年の学制改革によって、旧制山口高等学校の校旗、校章、校名表札、その他の事務関係書類が、山口大学文理学部へ引き継がれ、保管されているという事実の当然の帰結とも言えることであります」

「その点を如実に示しているものが、昭和四十年刊行の旧制山口高等学校と山口大学文理学部の合同の同窓会名簿の発行であったのですが、それ以後の同窓会名簿は別個のものになってしまったというのが、今迄の経過でありました」

■第五話

「ジンプン」学部が「ジンプン」学部か

新学部「人文学部」の呼び方について、前学部長であり当時学長であった田中晃氏が『鴻文』五号(S六〇)に一文を寄せている。前年の第二回総会での同氏挨拶の主旨。要約次のとおり。

人文学部の呼称について、ジンプン学部と呼んでいるようであるが、私見としてはジンプン学部と呼びたい。

ジンプンといえは、天文・地文という天地人という道理の上に立脚するものであり、この天地の道理を自覚、実現するところに人間の道理はある。

ジンプン＝人文主義はルネッサンス以来の文明主義、ヒューマニズムであるが、一歩進めば

人本主義、人間中心主義となる。今日の科学・機械文明はこの人間中心主義の所産であり、人類を生存の危機に直面させている。

「もし人間が中心であるとすれば、それは天地を支配征服するのではなく、逆に天地の道理を安宅として、それに立脚しそれを実現するところにある。それが古来の天地人の思想であり、天文・地文・人文の意味するところである」

人文学部の学問は二一世紀の危機に対して人間に対して警告を発する人間の英知としての使命をもつ。その人文学部であることに意を留めてもらいたい。

■第六話

哲学者の往きさま、その真実の響合い

元学部長、元学長であった田中晃氏の逝去に際して、『鴻文』一八号(H一〇)に立川和正氏が追悼文を寄せている。

「その葬儀は、非常に感慨深いものだった」に始まり、その告別式は

「まさに『哲学者の死』にふさわしく、深い濃密な『死を送る空間』であった」

「四人の僧侶……の説経は、……『死につくある存在』というハイデガールの言葉をよく口にしておられたが、その通り、声明(しよみょう)の中を堂々と往かれています、と納得させられた」

と伝える。

さらに「九十一歳の大往生」だとし、昭和三三年から四年間、学長職にあつて、当時の「蛸足大学」から「明確なヴィジョンを持ってハードとソフトの両面を開拓し、名実共に総合大学としての基盤を確立された。その上に今日の山口大学があるのだ」と讃え、その上で

「その仕事は、相当な荒業であり、激務であつたはず。およそ哲学者にふさわしくない。

「よくもあれだけの事が出来たもんだな」

と同席の友人に問い、その答えを

「先生の回りには先生に仕事を成し遂げさ

せてあげたい……何か役立ちたいと思った人がかなり居たはず。そうでなければ出来ることじゃない」

「なるほど、古代ギリシャでは政治家といえは哲学者であった。哲学者は……相手から真実を引き出す。こちらが真実のみ仕えるものであるからだ。真実は真実と響き合う。先生はそれを証明されたのだ」

なお、辞世の一首も添えてある。「これの世におもひ適へることひとつ程よきほどに酒は飲みたり」

■第七話
昔の学生食堂だと定食一膳が四〇〇円

『鴻文』二二号（H一四）では「山大生いまむかし」と題して、特集アンケート結果を発表している。これによると、昭和四〇年前後の文理記念館食堂では定食が「四〇〇円くらい」。

- ①朝食……二〇〇円
 - ②昼食……三五五円
 - ③晩食……四五五円
- 「三食で一五〇円までといったところ」とある。

■第八話
学園進む女性進出、なでしこクーポン

女子学生が圧倒的に増えた。昭和三一年（一九五六）の文学科入学生六〇名のうち女子は三名。当時は「紅三点」と衆目を集めた。それが平成一二年（二〇〇〇）になると、人文学部の入学生二二五名のうち一四五名までが女子。

『鴻文』四号（S五九）で当時副会長の大塚博久氏がキャンパス状況を、「廊下を行き交う学生たちの、一種独特の高い調子の、早くともどもなく続く会話、響く靴音、こだまする嬌声……」と寸描しているのも、そうした女子学生の進出

を前提としてのことであろう。

『鴻文』一五号（H七）で入谷仙介氏「女性と大学」が、いわゆる「女子大化」が「教官人事にまで反映し始めている」として、

「山大人文学部にも、今では七人の侍ならぬ、七人の女性教員がいて、研究教育の分野で大いに活躍している」と告げる。

その教員への女性進出の第一号が小谷典子氏。『鴻文』二九号（H二二）の退任の辞で、「学部始まって以来の女性教員……」と自己紹介……

「中には、『女はいらんことをしなくてもよい』とか『女を採るなんて、よほど人がいなかったのだから』と直接言われる先生もおられ、女性教員はよほど目障りであったようである」

「肝心の学生たちも『何でぼくたちの先生は女なの』とぼやく始末……」

などと、当時（S五四）の模様を伝えている。ちなみに、当『鴻文』誌の編集スタッフも目下女性四名。「なでしこクーポン」のピッチに立つ。

■第九話
大学の法人化と人文学部の役割

平成一六年から山口大学も法人化した。

『鴻文』二三号（H一六）学部長田中晋氏の「国立大学の法人化について」が、この法人化について概略を報告。その上で懸念を表明している。

「競争原理を押し進めれば、財政的基盤の弱い地方国立大学の、とりわけ文系の基礎的学問分野の衰退につながる。これが危惧されます」

「二十世紀、自然科学は驚異的な発展をなしましたが、一方において人間に関する学問がなくてはなりません。『知の時代』と位置づけられる二十一世紀にあつて、『人間とは何か』を問う人文学部の担う役割には極めて大きなものがあると思います」

続いて、次号『鴻文』二四号（H一七）での副学長補佐小谷典子氏の「山口大学は、今！」

が法人化の目下の状況を告げている。

「法人としての大学は、大学外からの評価を意識して、中期目標、中期計画、実施プログラム、その達成、達成を示す書証と、今のところ法人組織としての形式を整えるための膨大な時間が必要となっている。これが生活時間の中に大きくのさばってきて、大学は本来、教育研究機関であるという姿が薄れてきている感もある」

「大学の組織運営にかかわる仕事を済ませた後の時間が、ようやく授業準備のための時間となる。その授業のための基礎となる研究活動はというと、さらに後回しになる」

「法人のメリットが表れるには、まだまだ相当の時間が必要であろう」

■第一〇話
同窓会の仕事と学内委員の限界

鴻文会という同窓会の日常的な業務を、だれが担っていくのか。

『鴻文』二八号（H二二）での副会長本田義昭氏の「同窓会をめぐる状況」は、本学教員として勤務する卒業生を同窓会の「学内委員」「学内幹事」として充ててきている運営体制について、その窮状と、限界の到来を訴えている。

- ①最近一〇年間は同窓教員が六〜七人いて、何とか運営を続けてきているが、教員定員の削減で数年後には三名になる。
- ②大学・学部の仕事が増加。若い教員でも五つくらいの委員を兼任。
- ③「学内幹事が鴻文会のお世話に費やせる時間的余裕は法人化を境に半減し、学内幹事の数も数年前の半数になりますので、このままでは鴻文会の運営が滞ることが十分予想されます」

■第一一話
男性の更年期には同窓会ホルモンを

加齢とともに、同窓会といえはとかく健康談

議、体調放談に話の花が咲くものであるが、わが『鴻文』誌では「健康」発言は皆目といってよいほど散見にも及ばない。あらためて鴻文会の「品位」「品格」のほどを思い知らされることしきり。

ところが、あるうことか「男の更年期」などという、極めつきのシモネタ？発言が飛び出しているのが、『鴻文』三〇号（H二二）の会長岡光一浩氏の会長報告「鴻文会、この一年」。

「（男の）更年期になると、なにかと人づきあいがおっくうになって引きこもりがちになつてしまふが、今、私は、同窓会への関わりが誰にとつても元氣と社交性を豊かにしてくれる『社会性ホルモン』になるのではないかと期待している」

おかげで男性編集委員北川などは、思わぬ酒席で妙齡芳紀の女性編集スタッフから面と向かつて、それも超マジで

「男の更年期って具体的にどうなっているですか？」と質問（取材？）されるという、後日譚に遭遇する羽目とはなつた。以下、割愛々々！。



現在の大学通り

鴻文会、この一年

会長 岡光 一浩

現スタッフの二年目に当たる、昨年九月頃からの鴻文会の一年について振り返ることにします。二年目の活動も会報「鴻文」第三〇号の編集から始まりました。会長・副会長に、昨年同様四名の編集委員、さらに今回は学部からの一名の委員も加わって、九月二日から十二月二日までの併せて五回の編集委員会をもちました。会報作成の方針や原稿の依頼、レイアウト、校正、発送など、協議を重ねながらの夜遅くまでの仕事でした。とりわけ、編集委員をお願いした四名の方は勤務が終わってからの仕事であり、その献身ぶりには頭が下がる思いです。会報の構成や内容については前号に準じていますが、大先輩の和田・八木両氏の叙勲のお祝いを申し上げ、玉稿をいただいたことはなにより喜びでした。また、大学や山口の写真を多く取り入れ、カラフルさが目立つ会報となっております。しかし、慌ただしい歳末を間近にした編集・発行・発送となり、不注意によるミスも多々あるかと思いますが、なにとぞご寛容のほどをお願いいたします。なお、今回のこの三十一号は従来の記事に加えて、これまで鴻文会を支えていただきました丸本山口大学長、湯川人文学部長からご寄稿をいただき、会員の声も多く掲載して鴻文会発足三〇周年記念号といたしましたことを申し添えておきます。



鴻文会連絡事務所

次に、五月一四日に連絡事務所で行いました今年度の役員会の協議内容について主だったところをお伝えしておきます。役員一九名の出席を得て、二二年度事業報告や山口大学同窓会理事會、山口大学創基二〇〇周年記念事業計画・実施部会報告、二二年度決算および監査報告、二二年度事業計画・予算、その他などについて三時間を超えて協議を行いました。その一部は次頁にも掲載されておりますが、山口大学の各学部の同窓会で形成されています山口大学同窓会理事會や、二〇一五年の山口大学創基二〇〇年に向けての協議については北川副会長による別掲の報告をご覧いただきたいと思えます。また、この役員会では母校支援のひとつとして平成一九年から始まった大学院留学生への奨学金の授与について、留学生の寡少につき規則等を来年度に向けて見直すことが決定されましたが、今年度に関しては、現行どおり進めることが了承されました。その件につきましては、後日、慎重審議を行い、中国からの留学生二人に奨学金を授与することを決定し、八月九日連絡事務所にて授与式を行いました。本号にはそのお二人からの寄稿が掲載されております。さらに今回の役員会で新しく協議し決定されましたことには、鴻文会発足三〇周年を記念して、今後、研究室ごとの同窓会や同期会に対してその推進を奨励するために経済的な助成を行う、ということがあります。その要領等は本号やホームページに掲載されております。会員相互の親睦と交流が盛んになることを期しての助成ですので、ぜひ、そのような企画をお持ちの方は進んで申請の手続きを取っていただくようお願いいたします。また、鴻文会のホームページについては、本号でも最後の頁で紹介しておりますが、今回あらたにこれまでの会報すべてをデジタル化して掲載していることも併せてご報告しておきます。

ところで、同窓会に課せられた任務は、大きく言いますと、会員に対するサービスと学部に対する支援ということになりましょう。しかし、ご覧のように、私自身の能力不足と怠慢な性格のため、なかなか皆さまのご期待どおり

なし得ていないことも多く、心苦しくまことに申し訳なく思っております。鴻文会の現実を見ますとあまり威勢の良いことは申せませんが、同窓会のもつ意義を維持・追求すべく、これからの三年目も一歩でも前に進むべく励んで行きたいと考えておりますので、会員の皆さまのご協力をよろしく願いたします。最後になりましたが、多くの会員の皆さまが「賛助会員」制度にご賛同いただき、多額のご厚志をいただいておりますことを心から感謝申し上げますとともに、皆さまのお気持ちに報いるよう、より良い鴻文会にしていきたいと考えております。なにとぞ今後ともよろしく願いたします。



第三九回役員会 (平成二三年五月一四日 鴻文会連絡事務所)



鴻ノ峰

自著出版図書の紹介・案内の募集

自著出版の図書をお知らせください

ご自身が書かれた本がありましたら、ぜひ本誌紙面でも著者の顔写真、図書の表紙写真とともにご紹介、ご案内ください。

同窓の知人の方に依頼しての書評でも結構です。書評の場合は著者の顔写真だけでなく書評者の顔写真も載せることとします。

タイトル・氏名・卒業年次と顔写真(一名の場合)で一〇行。図書の表紙の写真の掲載面積はタテ一段八行とします。

図書の題名、出版元、出版年月、サイズ、頁数、頒価などとともに、内容の主たる構成をはじめ、著作の動機、目的、事情、それに反響や出版のエピソードなどをご紹介ください。また同窓の方からの感想や各方面の評判を添えられても結構です。

これらを合わせて全体で半頁二段(八二行)に収まるよう構成してください。

送稿の方法、締切りなど本誌二一頁の募集要領も参照願います。

◎平成22年度事業報告

1. H.22年度事業・予算検討委員会（4月16日・5月7日）
2. 正副会長会議（5月7日）
3. 第38回役員会（5月22日）
4. 留学生奨学金授与式（7月27日）
5. 第6回・7回・8回山口大学同窓会理事会（7月27日・12月6日・H.23年3月3日）
6. 「鴻文」編集会議（9月2日・11月5日・12月10日・12月22日）
7. 農学部同窓会（農会）出席（11月6日）
8. 会報「鴻文」第30号発行（12月20日）
9. 第1回山口大学創基200周年記念事業企画・実施部会（H.23年3月3日）
10. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席（H.23年3月22日）
11. その他

◎平成23年度事業計画

1. 正副会長会議（5月6日）
2. 第39回役員会（5月14日）
3. 会報「鴻文」編集会議（未定）
4. 山口大学同窓会理事会（未定）
5. 山口大学創基200周年記念事業企画実施部会および事業支援部会（未定）
6. 留学生奨学金授与式（未定）
7. 会報「鴻文」第31号（鴻文会30周年記念）発行（12月予定）
8. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席（未定）
9. その他

◎平成22年度決算

収入総額	5,559,042円
支出総額	2,148,210円
残高（次年度繰越金）	3,410,832円

〈収入の部〉

科 目	当初予算額	決 算 額
繰 越 金	419,124	419,124
会 費 収 入	3,600,000	3,400,000
繰 入 金	0	1,409,000
費 助 金	300,000	307,760
雑 収 入	876	23,158
合 計	4,320,000	5,559,042

〈支出の部〉

科 目	22年度予算額	決 算 額
会 議 費	150,000	58,442
役 員 等 行 動 費	50,000	48,991
事 務 所 運 営 費	850,000	816,000
事 務 費 ・ 通 信 費	125,000	156,864
会 報 費	630,000	686,260
ホ ー ム ペ ー ジ 維 持 費	130,000	46,204
分 担 金	150,525	150,840
寄 付 金	100,525	100,000
奨 学 金	150,525	50,630
総 会 費	0	0
人文学部30周年事業	0	0
慶 弔 費	50,000	33,979
予 備 費	1,933,425	0
合 計	4,320,000	2,148,210

〈特別会計〉

科 目	21年度財産	22年度財産
中 国 電 力 債	1,418,497	1,438,657
定 額 預 金	4,359,000	2,950,000
合 計	5,777,497	4,388,657

平成23年5月10日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 村田 博
渡邊 早苗

◎平成23年度予算

〈収入の部〉

科 目	23年度予算額	摘 要
繰 越 金	3,410,832	
会 費 収 入	1,800,000	10,000×180人 H23.4/1～H24.3/31納入者
繰 入 金	0	特別会計より繰入
費 助 金	300,000	
雑 収 入	9,168	利子等
合 計	5,520,000	

〈支出の部〉

科 目	23年度予算額	摘 要
会 議 費	100,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役 員 等 行 動 費	100,000	会長・副会長等行動費、会報編集会議等の活動援助
事 務 所 運 営 費	850,000	家賃、人件費、横断幕取付・撤去費 事務所経費（電話、電気、町内会費）
事 務 費 ・ 通 信 費	150,000	封筒印刷5,300枚、事務印刷費、 通信連絡、郵送、消耗品、雑費
会 報 費	1,200,000	印刷6,500部、郵送5,300通、発 送アルバイト代
ホ ー ム ペ ー ジ 維 持 費	50,000	プロパゲ契約料、メッシュ料、その他
分 担 金	150,840	山口大学同窓会（手数料含む）
寄 付 金	100,000	山口大学教育財団「日中学術交流基金」
奨 学 金	150,840	留学生への支給（手数料含む）
慶 弔 費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、 その他香典料、弔電
積 立 金	2,000,000	特別会計へ繰入
予 備 費	618,320	
合 計	5,520,000	

〈特別会計〉

科 目	23年度財産	摘 要
中 国 電 力 債	1,438,657	東洋証券
定 額 預 金	4,950,000	一般会計より繰入
合 計	6,388,657	

山口大学同窓会／理事会報告
**創基二〇〇周年の
 記念事業に向けて**

前号既報してからの各回理事会の主たる議事内容は、次のとおり。
 本会からの出席者は、いずれも会長岡光、副会長北川。

《第七回》理事会（平成二二年一月二六日）

スタートした二〇〇周年記念事業

(一) 山口大学創基二〇〇周年記念事業
 二〇一五年を期して開催が予定される山口大学創基二〇〇周年事業について、大学側から一月二二日から施行の同「記念事業会規則」（学長裁定／全一条）が示され、西田副学長（理事）から説明があった。
 また佐々木会長から同事業会の①企画実施部会と②支援部会への各学部同窓会からの部員各一名の参加と所属の要請があった。
 なお、学長の説明だと同様の事業に、東京大学は二五〇億円、九州大学は四〇億円の募金を集めたという。
 以上四五分の協議があつて了解された。
 なお、会議終了前の「その他」の項でも二〇〇周年事業について重ねて一連の発言があつた。

「二〇〇年記念事業は最大のテーマである。山口大学が生き残るための事業だ。《これなら募金しよう》という事業でありたい。専属の事務局長を置くべし」（中村監事）
 「立ちあげた段階で専属の事務局を置き、電話も一元化する」（西田副学長・丸本学長）
 「将来、三〇〇周年を迎えた時の抛り所となるような事業とする」（西田副学長）など。



第7回理事会の一場面

(二) 次期会長の選出方法
 各学部同窓会から候補者選考委員を出して検討する。

(三) 学部同窓会の新公益法人制度への移行の進捗状況
 現在にあつて法人格を有する学部同窓会の四団体から、新公益法人への移行の進捗状況について報告、質疑があつた。

《第八回》理事会（平成二三年三月三日）

理事会が初めての懇親会を開催

- (一) 山口大学創基二〇〇周年記念事業
- 西田副学長から
- ①ロゴマーク
- ②式典
- ③記念誌
- ④記念館

について、現時点での概要説明があつた。質疑含めて三〇分。

(二) 次期会長の選出方法
 各学部一名の選出者からなる候補者選考委員会のリストが配られ、これを了承。
 なお、会議の後、初めての企画として懇親会がセントコア山口で開催された。会長岡光が出席。
 また、同日は理事会に先立って山口大学創基二〇〇周年記念事業会の企画・実施部会の第一回会合が開かれた。これには副会長北川が部会員として出席した。

《第九回》理事会（平成二三年八月九日）

震災で募金活動は一年遅らせて

- (一) 平成二二年度決算報告
 例年支出額ゼロ。承認。
- (二) 山口大学創基二〇〇周年記念事業
 理事西田（副学長）から大学側での検討状況について報告があつた。
 ①募金活動については、東日本震災の関係から一年遅らせて実施することとした。
 ②企画実施部会に①式典部門と②広報部門を新設した。
 ③式典会場としては、会場規模、駐車スペースからして「さららドーム」を予定。
 ④山口講堂跡の記念碑を山口公設市場跡地に建てることとして、山口市と折衝中。
 ⑤記念建物としては段階的拡張可能な野外音楽堂のようなものを構想している。
 など、全協議六五五分。

（文責 北川 健）

同窓写真募集

わが母校！わが同窓！の写真を

「わが母校！」「わが同窓！」「この一枚の写真！」とでもいった感銘の写真がありましたら、ぜひご披露ください。

写真はタテ一段、ヨコ二〇行くらい。

撮影の場所、
 撮影の年時、
 行事の名称、
 撮影者の氏名、
 被撮影者の氏名または集団名、
 などとともに、その写真にまつわる思い出を書いてください。

タイトルと氏名、卒業年次とともに顔写真を合わせて一〇行。それに紹介写真（二〇行）とその解説や思い出の記を合わせて八二行。全部で半頁（二段八二行）に収まるように整えてください。

写真はお返しします。写真は、掲載上の誌面の都合でトリミングする場合がありますので、ご了承ください。
 本誌一一頁に投稿要領を掲げておりますので、ご参照願います。



大学祭でのヨサコイ踊り

留学生奨学金授与生寄稿

山口大学での生活

陳 穎卓

二〇一二年九月二十五日で、日本に来てからまる二年になります。いつも通り過ぎる道を見て、いつも行っている大学を見て、二年前の自分を思い出して、複雑な気持ちで湧いてきました。

大学を卒業した後二か月で山口大学に来ました。自分の日本語の能力や日本の社会に対する理解はまだ足りないところがたくさんあって、日本に留学したいと大学の先生に話してみたら、先生はこの貴重なチャンスを与えてくれました。

一〇月に入ってからが研究生として半年ぐらい勉強してきました。この半年は大学院の受験で大変でしたが、中国では聞いたことのない知識を先生に教えてもらいました。今もよくその時のノートを見たりしています。自分がメモした内容と先生が赤いペンで修正してくださったところを見て、懐かしい気持ちでいっぱいです。中国では、大学院を受けるには、自分なりに本を探したり、勉強したりしか準備できない場合が多いです。それゆえ、情報についてはつきりわからないことが多く、受からないときも多いです。山口大学に来て、林先生は「大学院試験講座」を設けてくださったので、とても安心して準備できました。その時、日本の大学はとも学生さんの気持ちを考えてくださり、親切だなと思いました。

林先生と「大学院試験講座」担当の二人の先生のおかげで、山口大学人文科学研究科に入学できました。林先生は指導教員になってくださいました。先生の授業を受けて、自分の日本語を話す力が伸びてきたと感じました。なぜかという、先生は留学生の立場に立って、授業中は必ず日本人と座るようにしていて、ペアワークで話し合ったりして、日本語を話す練習にはとても役に立ちました。

勉強において、先生はいつも厳しく指摘してくださっています。先生のおかげで、研究に対する態度が分かってきました。それは、まじめ

に書いて、丁寧に書いて、みんなにわかっただけのような論文を書くということです。

生活において、先生はいつも面倒を見てくださっています。留学生なので、いろいろな面で困る時が多いですが、先生はいつも親切にしてくれました。大変お世話になっている林先生への感謝の気持ちは言葉では表せません。

後は副指導教員の磯部先生について話したいと思います。中国にいたとき、四年間ぐらい日本語を勉強していましたが、一番難しいと感じたのは敬語の使い方です。人、場面によって使い方が違うので、とても悩んでいました。山口大学に来て、磯部先生の授業を受けて初めて敬語について詳しく知ることができたのです。先生の授業はとも分かりやすく、内容が深いので、とても勉強になりました。なるべく正しく、丁寧に日本の方と話したいので、とても役立ちました。それから、論文についても磯部先生はいつも丁寧に指摘してくださっています。磯部先生に対して深く感謝しています。

ほかにもいろいろな先生に大変お世話になっています。山口大学の先生はみんな優しく、丁寧なので留学生の心細さが減りました。日本人の友達もできて、暇なときに一緒に食事したり、話し合ったりしてとても楽しいです。日本と中国はこんなに近いのに、いろいろな面で違いが大きいということを互いに気づきました。日本に来ていなければ、日本のよさを、中国のよさを客観的に知ることができなかったでしょう。

生活において、やはり日本の物価が高いと感じています。アルバイトもなるべく多くするようになっています。今回鴻文会の事務所で会長の岡光先生と副会長の北川先生から奨学金を授与していただき、とても役に立ちました。心から感謝しております。

また、岡光先生と北川先生は大学での話や日本と中国の話などいろいろしてくださり、とても親切にしてくださいました。二人の先生の笑顔は忘れられません。

最後に、再び山口大学で大変お世話になっている先生方、鴻文会の先生方に深く御礼を申し

上げます。今後もより一層努力し、日本の文化、社会を深く理解し、日本と中国の友好関係に役立てようと思います。



鴻文会連絡事務所にて
前列左 楊さん・右 陳さん
*H23年度鴻文会留学生奨学金事業の
奨学金を授与された留学生です。

山口大学での留学生生活

楊 燕

日本に来てもう二年になりました。時間はあつという間に過ぎてしまいました。振り返ると、この二年間には、たくさんのお話を学ぶことができ、いろんな人と出会い、いろんなことを経験したと感じています。

来たばかりの時は、本当に大変でした。生活の面で、いろいろ慣れていないことが多かったのですが、生活の中の日本語の難しさが感じられ、自分の日本語能力について自信を失うことが一番辛かったです。大学では、日本語を四年間も勉強しましたが、実際に日本語で話す機会が多かったとは言えません。人と話す時、聞き取れなかったり、うまく表現できなかったりすることが多かったです。あの時は、言葉のせいできびしくて、強い孤独感がありました。幸い、チューターの指導があって、生活にも、勉強にも助言や助けをいろいろいただいたので、だんだん周りの環境に馴染んできました。日本人の学生と一緒に授業を受けて、話し合うことによって、自分の話す能力も鍛えられました。その後、大学院に入って、優しい磯部先生のご

指導のもとで、勉強を続けてきました。修論のことで、ずっと先生に心配をかけていて、先生には本当に申し訳ないと思っています。

日本で生活して、最も感動したのは、やはり日本人の礼儀正しいところだと思います。今までの、たくさんの方と出会いました。学校で同じ授業に参加したクラスメート、講座で隣に座っていた社会人の方、足湯で挨拶をしてくれた初対面の人、旅行中に会った知らない人、これらの人と出会って、日本人の親切を感じました。中国で日本文化を勉強していた時、「日本人は礼儀正しい」とよく言われました。日本に来て、日本人と日常生活で接する中で、「日本人は礼儀正しい」ということが一層理解できるようになりました。

「日本はどうですか?」と、中国にいる親戚や友人からよく聞かれます。簡単に答えられないような問題ですが、自分の考えでは、日本は住みやすいところだと思っています。とはいえず、ずっと山口に住んでいるので、「住みやすい」とは、山口に対する感覚かもしれません。山口は田舎といわれますが、私のイメージの中の田舎とは違います。きれいな町並みで、デパート、スーパー、病院、図書館など、施設はすべて揃っていて、日常生活には何の不便もありません。自然環境の点からは、田舎と呼ぶのがふさわしいかもしれませんが、ここで生活して初めて、自然が人間にどれだけ近いかわかりました。今住んでいるアパートは、夏になると、すごく蒸し暑いですが、夏の夜に、虫や蛙の鳴き声を聞きながら眠るのは、私のはじめての体験です。雨の日に、ダダアアと雨が屋根を打ちならす音を聞くのも、少し風情が感じられます。こういう自然に恵まれている生活は、素晴らしいと思います。

長いような、短いような二年でした。修了まで、あと半年だけです。残りの半年を大事にして、充実した毎日を楽しんで過ごしたいと思っています。今までの山口大学での留学生生活は、自分にとって貴重な体験で、人生の中でかけがえない宝物だと信じています。

人文学部教育職員紹介

(平成二十三年一月現在)

学部長(併)
教授 湯川洋司

〇言語文化学科
教授 林伸一
教授 平野芳信
准教授 磯部佳宏
准教授 森野千弘
准教授 尾崎千佳

〇人文社会学科

哲学・思想コース
教授 高木智見
教授 脇条靖弘
教授 Alan Djumali
教授 柏木寧子
准教授 藤川哲
准教授 田中均
准教授 周藤多
講師 栗原剛

歴史学コース

教授 中村友博
教授 田中誠二
教授 額田厚
教授 橋本義則
教授 馬本彪
准教授 滝野正二郎
准教授 藤永康
准教授 真木隆
准教授 村田裕一

社会学コース

教授 辻正二
教授 湯川洋彦
教授 坪郷英司
教授 横田尚俊
教授 高橋征仁
准教授 速水聖健
准教授 岡邊健

日本語学・日本文学コース

教授 阿部泰記
教授 富平美波
教授 根ヶ山慎一
准教授 更科徹
アジア言語学コース
教授 平野尊
准教授 和田学

英語学・英米文学コース

教授 岩部浩三
教授 太田聡
教授 宮原成一
教授 池園宏志
准教授 赤羽仁志
講師 メドロック麻弥

ヨーロッパ言語・文学コース

教授 井上三朗
教授 本田義昭
教授 Hintereder Emde Franz
教授 武本雅嗣
准教授 下寄正利
准教授 坂本貴志

言語情報学コース

准教授 Phillips John David
准教授 乾秀行

図書館司書養成課程

准教授 松田泰代

学生数

人文学部 (平成二十三年一月現在)

	人文社会学科	言語文化学科	合計
1年	101	98	199
2年	102	100	202
3年	98	91	189
4年	127	109	236

人文科学研究科

	地域文化専攻	言語文化専攻	合計
1年	3	4	7
2年	6	7	13

平成二十二年度

学部卒業生・大学院修了生の進路状況

	学部卒業	大学院修了		学部卒業	大学院修了
建設業	2		飲食店・宿泊業	2	
製造業	11		生活関連サービス業、娯楽業	2	
電気、ガス、水道	2		医療業・福祉	4	
情報通信業	7		教育、学習支援事業	21	1
運輸業、郵便業	3		複合サービス事業	5	
卸売・小売業	27	1	サービス業	4	
金融・保険業	12		公務	27	
不動産業	0		上記以外	0	
学術・開発研究機関	2		進学	4	

ご退任教員挨拶

山大を去るにあたって

中村 友博

山大には三五歳の時に採用されたから、ちょうど二九年間お世話になったことになる。私の時から六五歳定年制の導入が決まり、予定より一年長くなり六四歳での定年となった。その間、考古学で卒業した学生は、正確な数はただちに捕捉できないが、概数で申せば二〇五人から三〇〇人の間であろう。学生は人間であるから、おもしろい者もいる。おかげさまで私はない研究教育生活をたのしむことができた。それにはありがたくも、先任の近藤喬一教授や現在の同僚である村田裕一准教授のご高配やご支援があったわけで、加えて同僚の長きにわたるご交誼もあった。ここに謹んでお礼申し上げる次第である。これからは身近に若者が居ないことをきつと物足りなく感ずるだろう。

山大に転動しても、山口県では考古学で私の先輩にあたる同姓の中村徹也氏が山口県埋蔵文化財センターの所長として令名をはせているから、この方の名前に埋没しておれば、学生時代同様なんとか無事に過ごすことができるのではないかと思つた。おまけに地方大学は小姑もおらず、刺激の少ないのが取り柄である。そう思つて着任してみたものの、あまりの刺激の少なさにカルチャー・ショックを受けてしまった。日が暮れて都会からもどると、小郡駅で湯田温泉行きのバスのランプが闇夜にぼつと青白く光っている。気が滅入ってしかたがない。しかし落ち込めれば反転するの私が生来、単純な性格の証拠であろう。職場の重要な会議である拡大教授会では、教授層に分別のある意見を出す先生が多くおり、また同世代の助教教授も研究に燃えており、しかも実務にたけていた。自分がもの申すことは無用で、幸い自分がなすべきことは何か十分考えることができた。学生を連れて発掘に行ったこともある。自前で発掘をするのはとても手間で、まずなによりも地代や作物補償なしに地権

者の了解を取るのがむずかしい。行政の依頼による発掘はこうした雑用がないぶん楽ではあるが、所詮下働きである。結局、地元の遺跡の発掘よりも大事な研究があると自己を戒め、東南ヨーロッパの考古学の文献読みと縄文末・初期弥生の土器調査を主とすることになった。横文字読みは学期を、土器調査は休業期間をあてたが、独法化以後は予算と時間の余裕がなくなり、二足のワラジどころか、一足を履けるかどうかもあやしくなつてしまった。

昔、日中は銀行員として銭勘定をし、夜間の私事として考古学をする奇特な研究者もいた、というよりも考古学をもって生計とすることは不可能であった。ところが政府の文化財保護法のきびしい運用から発掘調査員が不足し、考古学の秀才はともかく公務員として迎えられるようになった。ところが規制緩和の政策から今度には考古学での就職がきわめて困難になった。学生はきわめてこの動向に敏感である。考古学の仕事は物が相手だから、習熟するのに手間と時間がかかる。いやむしろ従来は行政対応として、学部卒を急ごしらえの専門職として、大学院教育を学部で詰め込んでいたのかも知れない。こうした紆余曲折はあるけれども、その間、人文学部での考古学の研究教育が順調に進んだのは、鴻文をはじめ卒業生の先輩各位、隣接分野の方々、埋蔵文化財資料館職員、部局、大学の役員、そして事務局のご支援の賜である。退職にあたり一言御礼を申し上げる次第である。

(歴史学コース 教授)



考古学実習の風景

ご新任教員挨拶

ごあいさつ



速水 聖子

昨年四月より山口大学に赴任することになり、あつという間に一年半が過ぎようとしてい。出産・育児による五年間のブランクがあつた上での本格的な社会復帰で、大学での教育・研究生活に慣れるには今少し時間がかかりそうである。山口での生活は子育てしながらということもあり、社会学コースをはじめとして人文学部の先生方にはお気遣いいただきことが多々あつて、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

私の出身は九州の鹿児島である。高校卒業までのほとんどを鹿児島で過ごし、大学からの約一〇年を福岡ですごしてきた。その後、結婚とともに就職し、神奈川県に居住するとともに福岡県いわき市の大学に勤めるといふ「週末婚」状態が約九年続いた。さらに、出産・育児と並行して非常勤講師としての勤務を経て、現在に至る。

自分の専門は地域社会学であり、なかでもコミュニティとは何か、現代社会における地域的共同性の可能性などについて考えたり、書いてきたりしてきたにも関わらず、自分の生活自体はなんと地域社会に根付かないくらしを続けてきたといえよう。一方で、それぞれの土地でのさまざまな生活経験を通して、まさに地域社会の多様性を肌で感じる事ができたようにも思う。自分自身がいろいろな立場で多くの地域との関わりをもつことができたことは、社会学を学ぶものとしては興味深い発見も得られる貴重なものであつた。さらにいえば、私自身の生活経験を社会学の観察として豊かなものにしていくためには、それぞれの地域での人々との出会い

であり、互いに支え支えられるというお付き合いの関係である。

近年、「孤独死」が社会問題となり、「無縁社会」という言葉で現代社会における人間関係のさらなる希薄化が問われている。また、少子高齢化といった社会変動は、経済状況の停滞を伴って、私たちに社会のセーフティネットから抜け落ちることのリスクや将来の見通しへの不安を掻き立てるものとなっている。三・一一の大震災は、このような意味での社会不安をさらに増大させるものであるといえよう。一方で、漠とした不安を抱えた現在、社会における人間の絆や関係性を見直す、あるいは問い直そうとする議論が多くみられる。

元来、社会学の誕生は、人々にとって未知なる変化である近代化という社会変動下における社会心理や社会関係の変容の分析を通して、人々のつながりとしての「社会」とは何か、を探求しようとしたところにある。このように解釈すると、現代社会はまさに社会学の原点を見つめなおす時期であるように思われる。

山口では大学の教員としてだけではなく、子育てする母親のひとりとしても地域社会に参加する立場となった。縁あつてくらすこととなつた山口の地を足場として、研究者かつ生活者としての視点から、人々がつながりあつてくらすことの意味について考えてみたい。

(社会学コース 准教授)



大学構内

平成二三年度 山口大学人文学部生涯学習事業

山口大学人文学部は、地域社会との交流を深め、幅広い年齢層の豊かな教養の保持と知的向上のために、今年度、次のような事業を行ってまいりました。

(一) やまぐちサタデー・カレッジ(公開講座)
人文学部の特色を生かした公開講座として平成一三年度に始まりました「やまぐちサタデー・カレッジ」も、お陰様で今年一一年目を迎えました。今年度は前期一講座、後期一講座の計二講座を開講し、総計五〇名ほどの方々に聴講いただきました。週末の午後、社会人と現役の学生が共に楽しく学んでおります。

会場 山口大学人文学部教室
前期(五月〜六月)
異文化交流コース 赤羽仁志准教授
「英語の歴史」
後期(一〇月〜二月)
日本文化コース 林 伸一教授
「コミュニケーション能力養成講座」

来年度も前期・後期に開講する予定です。詳細は、三月頃発行されます受講案内をご覧ください。

(山口大学エクステンションセンター、
電話083-9333-5059
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

(二) 出前講義

山口大学では、大学教員が各地の学校に向いて専門的な内容をわかりやすく講義する、いわゆる「出前講義」を実施しております。今年度、人文学部教員が出講した出前講義は、山口県内の高校を中心に、計四件ありました。

来年度も、今年度同様、地域社会の要望に応じてまいります。教員の講義できる領域などを掲載した資料がありますので、お気軽にお申し出ください。

(山口大学エクステンションセンター、
電話083-9333-5059
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

(三) 開放授業

大学の授業そのものを一般の方に開放する「開放授業」はエクステンションセンターの事業として平成一八年度から始まりました。人文学部では今年度計九件の授業を開放しました。科目名や科目数などは未定ですが、来年度もいくつかの授業を開放する予定です。詳細はエクステンションセンターのホームページをご覧ください。

(山口大学エクステンションセンター、
電話083-9333-5059
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

なお、昨年度まで毎年秋に二・三回に渡って実施してまいりました「人文学部公開講演」は、山口県内の各地を回って研究成果を地域社会の皆さんに還元するという当初の目的をほぼ達成しましたので、当分取りやめることとし、代わって来年度から防府市の生涯学習事業に参加することになりました。



最終講義のお知らせ

中村友博先生最終講義のご案内

日時：平成二四年三月三日(土曜日)
午後二時三〇分
場所：山口大学学生会館ホール
問い合わせ先
中村友博先生退任記念事業会事務局
村田裕一
山口大学人文学部
〒753-8540
山口市吉田一六七七一
TEL/FAX
083-9333-5235

辻 正二先生最終講義のご案内

日時：平成二四年三月三日(土曜日)
午後二時三〇分から
場所：山口大学人文学部小講義室
問い合わせ先
高橋征仁
メール
takahashi@yamaguchi-u.ac.jp
〒753-8540
山口市吉田一六七七一
山口大学人文学部社会学研究室
TEL/FAX
083-9333-5245

おいでませ！山口国体



山口県は、今年国体の年でした
10月1日 開会式



研究室同窓会だより

社会学同窓会総会

宮藤 隆夫

平成二十三年度(第三四回)社会学同窓会総会は、六月四日(六月の第一土曜日)、恒例の会場である山口市熊野町の防長苑で午後四時から開催された。また、総会終了後交流会が行われた。

当日、研究室から辻 正二先生と横田尚俊先生のお二人にご出席をいただいた(当初出席予定であった小川全夫先生・速水聖子先生は都合により欠席された)。また、九州大学大学院比較社会文化研究室内の三隅一人先生にもご出席をいただいた。

同窓生会員の出席者は、文理第二回・昭和二十九年卒業組で毎年出席の住吉隆義さん、松崎公彦さん、宮川秋三さんのお三方、特に、広島から毎回出席をいただく住吉、宮川の両先輩には頭が下がる思い。感謝、感謝である。

このほかの出席者は、久しぶりに出席の佐々木喜次さん(文理第九回・昭和三十六年卒)、本年三月、長年の单身赴任生活を終え帰郷された



山口市熊野町「防長苑」にて

久保博務さん(文理第一八回・昭和四五年卒)をはじめ、福岡から毎回出席の若手の要 貴志さん(人文第二二回・平成一四年卒)ほか九名、今年の総会への同窓生会員の出席者は、総勢一五名であった。

総会は、森重祐二副会長(文理第二八回・昭和五五年卒)の司会進行により始まり、会長あいさつの後、九州大学の三隅先生にご挨拶をいただき議事に入った。

議事では、平成二十二年収支決算報告が行われた。この中で、昨年度は毎年発行している同窓会報の発行経費など、毎年必要とされる経費の支出が、卒業生の同窓会入金収入を上回り、不足分については繰越金で充当したことなどが報告された。その後村田 博監事(文理第一五回・昭和四二年卒)が監査報告を行い、収支決算は全会一致で原案通り承認された。

議事終了後講演会に移り、山口大学時間学研究所長である辻 正二先生の「時間学の取り組み」と題するお話を全員で拝聴した。

限られた講演時間の中で辻先生は、「山口大学の時間学研究所が目指す時間学とはどのような学問か」、「何故、時間学が必要か」、「時間学の可能性」などについて、興味深いお話をされた。

山口大学時間学研究所は、十数年前、当時の山口大学の広中平祐学長が大学改革の一環として提唱され、平成二二年四月に設立された。

「時間」という観点から自然・人間・社会・文化を理解し、新たな学際領域を創造するとともに、その成果の社会的な還元を目指している(時間学研究所の紹介パンフから引用)「もので、本年度の文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞されている。受賞を記念して本年六月には、二日間にわたり山口大学で「時間学公開学術シンポジウム」が開催され、平成一八年から所長をお務めの辻先生が「東日本大震災と時間学」をテーマに記念講演をされている。

総会終了後、引き続き席を別室に移して交流会に入った。交流会は、宮川先輩の乾杯の音頭で開宴し、しばらく歓談の後、出席者一人ひとりが近況などを報告した。

本年の近況報告は、三月に千年に一度といわれている東日本大震災が発生したこともあり、横田先生からはこのことに関連した生々しい報告があった。歓談の時間を長く持ち会員同士の交流をより深めるため、近況報告は簡単に毎回お願いしているが、出席者一人ひとりにそれぞれの思いがあり、また、久しぶりに出席された会員の近況報告には何かと関心がある。話が長くなっても途中で話の腰を折るわけにもいかず、近況報告の時間管理には世話人として毎年一番気を使うところ。

予定時間二時間を若干オーバーし、出席者一同来年の総会での再会を約束し、最後は要会員の一本締めで盛会裏に交流会はお開きとなった。交流会を盛り上げるため昨年末では飲み放題にしていたが、近況報告に時間を取られ歓談の時間が以外と短く、また、出席会員の年齢層や健康管理等を考えて今年から取り止めた。

総会・交流会への出席をできるだけし易くするため、今年から交流会費を今までより低く抑えたが、今年からの総会・交流会出席者は、出席予定者までを含めれば二二名、ほぼ例年と変わらなかった。

(文理第一五回卒・S42・社会学)

《住所変更連絡のお願い》

毎回たくさんの郵便物が返却されてきます。住所に変更があった場合はご連絡をお願いします。

鴻文会連絡事務所

Fax: 083-928-4527

E-mail: fycsf998@ybb.ne.jp

東洋史学科懇親会を 楽しく開催

菊谷 進

去る一〇月二八日、山口市神田町KKR山あさくらで東洋史学科懇親会を開きました。今年で四回目となりました。

第五回卒業生から八回卒業生まで六人でした。十一時に集合。昼食を戴きながら談笑しました。

そこではそれぞれの生活の体験や友人・知人の最近の情報などが話題になりました。

話はすすみ、今の日本の政治や世界の動きについての考えなどと話題は拡がりました。

仲々話の尽きない楽しい集まりでした。解散のとき、来年も又元気で会いましょうと約束をし、山あさくらを後にしました。

(文理第六回卒・S33・東洋史学)



山口市神田町「KKR山あさくら」

研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会の開催に対する助成について

鴻文会では、会員相互の親睦と交流をより活発なものにするため、鴻文会発足30周年に当たり、研究室同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会（以下「同窓会等」という。）の開催に際して、下記により助成を行うことといたしました。

なお、同窓会等の開催案内・連絡用の会員名簿は、鴻文会連絡事務所に備え付けております。

記

【助成の対象】

- ・助成は、参加者（正会員）5人以上の同窓会等を対象とする。

【助成の申請】

- ・助成の申請は、同窓会等の名称、代表者名、参加人数、開催日時・場所等を明記した文書を事前に鴻文会宛てに提出するものとする。

【助成の内容】

- ・助成は、参加者（正会員）1人当たり千円とし、2万円以内とする。
- ・同一同窓会等への助成は、1年度1回限りとする。
- ・同一同窓会等へは、毎年度の助成は行わない。

【開催の報告】

- ・助成を受けた同窓会等は、会報「鴻文」に開催報告（写真添付）を掲載するものとする。

【適用年月日】

- ・平成23（2011）年11月1日以降に開催される同窓会等から適用する。
- ・本年度は試行年度とし、本年度の助成状況等を踏まえて、助成内容等について次年度以降見直しを行う。

*詳細については、鴻文会連絡事務所《Tel・Fax:083-928-4527、E-mail:fycs998@ybb.ne.jp》にお問い合わせください。

鴻文会「賛助会員」の制度にご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、新入生の「終身会費（一万円）」により行われています。

鴻文会は、この三〇年の間、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行、ホームページ管理などの活動を行い、最近では留学生への奨学金支給事業を開始するなど、活動も多様化しております。これらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して十分とはいえない状況であります。このような状況の中で毎年卒業生会員や元教員の皆様から多額のご厚志をいただき、諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。

活動を支えて下さった方々のお名前を左に記載して、お礼に代えさせていただきます。

なお、本年度も、賛助会員について、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

加入者名「鴻文会」

（郵便振替口座〇一五〇〇一四一五九〇二）と記した振替用紙を同封しております。それをお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしくお願いします。

平成二二年度賛助会員（順不同 敬称略）

池田厚子、大塚博久、垣下文雄、奥嶋明子、碩本史、中野直幸、藤井満江、岡光一浩、隅昭志、富尾諒子、田中敦子、宮藤隆夫、細山田康弘、大谷泰子、古賀信幸、八田彰、平川寛子、山本陽一郎、野村英子、沖中武志、磯部薫、松本馨、岩尾より子、松本英子、利重迪子、辰巳郁子、小野耕一、小池美佐子、戸谷美代子、奥田和子、吉村崇、秋村寛之、武田伊勢雄、中垣八朗、青木寛、平田昌司、水本孝二、松川典宏、岩田肇、濱崎勢津子、渡辺茂之、常松尊輝、住吉隆義、濱村祐子、兼清仁志、松尾善弘、丸山雄大、鈴木雅之、八田順子、森江裕

孝、宮原省吾、守田愉加理、伊東敬一郎、鳥越郎、村上正和、多田幸子、岡部晶子、小川欣宏、國弘豊嗣、柴田弘子、小野徹、芳野奈央、白井理恵子、菅朱美、江川数司、前原洋子、桑木紀雄、久保田千代子、野村悦子、中村秀行、平田真弓、笠井靖子、石原憲一、小篠美智子、山本力、小川朝子、高橋幸輔、小西啓子、菊谷進、殿河内恭子、塩治朋江、小田稜亮、池佳代、光永昇、浅野靖、平田則雄、藤永公然、小野美典、木村比沙子、川村崇臣、岩野訓子、西本青而、米屋廣志、井上奈緒子、林久博、椎野由紀子、隠塚真声、萩原正之、久保田教恵、福家里奈、岩見國夫、佐藤智寛、田村朋久、青木隆子、安永稔、野村昌弘、栗原宏、村瀬典弘、倉重雅子、内山俊彦、渡邊早苗、生野龍二、河野庸二、藤本由紀、横山鮎子

ご協力ありがとうございました。

鴻文会 会員名簿利用規則

- 一、会員名簿の更新（新規入会、異動に伴う）と保管は事務局で行う。
- 二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
- 三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができ、営利を目的とした利用は禁止する。
- 四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
- 五、会員名簿の開示申請者名簿（利用者名簿）を作成し事務局で保管する。

鴻文会会則

(昭和五十六年一〇月三十一日制定)

(総則)

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口大学人文学部内におく。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 1. 会報及び会員名簿の発行
- 2. 会員相互の連絡、親睦の増進
- 3. その他必要と認められる事項

(会 員)

1. 正会員 山口大学文学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部研究科修了者

2. 準会員 山口大学人文学部学生及び大学院人文学部研究科院生

3. 特別会員 山口大学文学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官

(会 費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時において上記の終身会費を納入する。

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年とし、再任は妨げない。

- 1. 会長 一名
- 2. 副会長 二名
- 3. 委員 若干名
- 4. 監事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。

1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は会長を補佐する。

2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、会務を処理する。

3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。

第八条 委員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部経験者(本会正会員)ならび

に会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。
第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

- 1. 事業の報告
- 2. 会計報告
- 3. 役員を選出
- 4. 会則の改正及びその他の重要事項

(支 部)

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則 この会則は昭和六〇年一月二日より改正施行する。

この会則は平成九年八月二三日より改正施行する。



大学通り(鴻文会連絡事務所前)

鴻文会役員

平二一・八〇平二五・八

名誉会長

湯川 洋司(人文学部長)

会長

岡光 一浩(昭四一年卒・ドイツ文学)

副会長

北川 健(昭三五年卒・国史学)

宮藤 隆夫(昭四二年卒・社会学)

顧問

和田 敏英(昭二八年卒・英米文学)

大塚 博久(昭三二年卒・中国哲学)

大野 光生(昭三二年卒・中国哲学)

田中 晋(昭四一年卒・英米文学)

添田建治郎(昭四四年卒・国文学)

委員

赤梨 和則(昭四二年卒・西洋哲学)

兼清 仁志(昭五二年卒・中国哲学)

原口 公康(昭六三年卒・日本思想史学)

浅川 均(昭六〇年卒・国史学)

山本 達夫(昭六〇年卒・西洋史学)

斎藤 禎(昭六一年卒・東洋史学)

村岡 睦子(平六六年卒・社会心理学)

大谷 泰子(平一三年卒・社会情報論)

正分あゆみ(平一六年卒・博物文化論)

青島 啓(平一〇年卒・博物文化論)

磯部 佳宏(昭六二年院修了)

岡屋 真理(平一六年卒・日本語文化論)

高田 知恵(平一三年卒・中国語文化論)

中村 匡宏(平九九年卒・英米語文化論)

池田 容子(平九九年卒・英米語文化論)

岡村 賢司(平七七年卒・ドイツ語学)

ドイツ文学/平一〇年院修了)

浅野 靖(昭五七年卒・フランス語学・フランス文学)

中村稚恵利(平一三年卒・言語情報論)

村田 博(昭四二年卒・社会学)

渡邊 早苗(昭五九年卒・西洋史学)

学内委員

本田 義昭(昭四七年卒・ドイツ語学)

根ヶ山 徹(昭六〇年卒・中国語学・中国文学)

磯部 佳宏(昭六二年院修了)

村田 裕一(平三年卒・考古学)

村岡 睦子(平六六年卒・社会心理学)



大学キャンパス前の蓮池

鴻文会のホームページ

鴻文会ではホームページを作成して情報発信を行っております。以下に概要をお知らせします。

公開：平成14年。平成19年にリニューアル。

更新：年に数回不定期で更新。

現在のコンテンツ：

- 1. 鴻文会とは
- 2. 鴻文会の沿革
- 3. 会長挨拶
- 4. 鴻文会役員
- 5. 新着情報
 - 鴻文会関連
 - 人文学部関連
 - 各研究室同窓会など
- 6. 写真コーナー
- 7. 会報
 - 「鴻文」PDFダウンロードページ
- 8. 保管庫
 - 鴻文会関連の規則など



今後はコンテンツを少しずつ充実させたいと考えております。今年度中には、会報「鴻文」の全てのバックナンバーを、PDFでダウンロードすることができるように準備いたしております。また、鴻文会発足30周年を期して始まった、「研究会同窓会・同期会・地域（ブロック）同窓会の開催に対する助成について」のご案内も早速掲載いたしました。目次5. 新着情報>鴻文会関連>「お知らせ」の項目内のリンクからご覧ください。今後は会員のみなさんから情報をいただいたり、あるいはご要望にお応えしたりといった形でも、拡充して行ければと存じます。

是非とも一度ご覧いただき、ご意見やアイデアをお寄せください。何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

URL: <http://homepage3.nifty.com/koubun/>

(鴻文会ホームページ担当)

編集後記

節目の而立の歳を迎えた鴻文会には、揺るぎのない確固とした立場が求められます。おとぎ話の主人公はさまざまな深刻な経験を通り抜けて本当の大人へと脱皮していきますが、鴻文会にとってもこれまでの三〇年が今後の成長を約束する経験であり、力を湧き出さすような魅力溢れる鴻文会でありたいように。

(岡光一浩)

寄せられた原稿に見入っていて「同窓は人財なり」と思った。それぞれ書くという「心のバネ」「心の財」を内蔵しておられるからである。そうした「心の灯火」「心の謳歌」をツナギ合わせていくもの、それが会誌「鴻文」の役目だと受けとめた。

会誌の名も「おひとり（鴻）の文（ふみ）」なり。次回から広く原稿を公募することとした。 (北川 健)

一昨年から柄にもなく編集委員という大役を仰せ付かっている。編集後記に名前が登場するほどの役目は果たしていないが、頭を使わなくて済む会報の封筒詰め作業では能力が発揮できていると考えている。

会報の発行には色々な人の協力が必要。発行は大変な仕事。多くの皆様の尽力に感謝、感謝。 (宮藤隆夫)

三月の大震災を境に、「絆」という言葉をよく目にします。人と人とのつながりの大切さを改めて実感した年になりました。

今回の会報も、皆さんの絆づくりに少しでもお役に立てると嬉しいです。 (渡邊早苗)

「万物生光輝」という禅語があります。心と心が結ばれ、全ての物を照らす希望の光が生まれますように。鴻文会はめでたく三〇周年を迎え、皆様との交流の中、益々光り輝くよう願います。

ます。そしてまた、東日本大震災からの復興を願うこの禅語を心に刻みます。 (村岡睦子)

今年にはが瓜を二本植えて緑のカーテンを作った。葉は影を作り、にが瓜は七〇個もなった。省エネと省マネだ。東日本大震災・原発事故を思い気持の沈む日々。ささやかな日常生活が続けられることを有り難いと思った。 (大谷泰子)

職場での仕事を一通り済ませてからの作業でしたので、私が編集に関わった部分は極々僅かです。編集者として名を連ねて良いのか、実に怪しいところです。とは言え委員の皆様とお会いできるのが楽しみです。私は毎回嬉々として鴻文会事務所へと向かいました。 (池田容子)

桜の咲く頃撮り始めた写真が、今回少しもお役に立てたのかなと、嬉しく思っております。 (事務員 小野早苗)



編集委員



会長と大塚顧問 (連絡事務所にて)

月曜日から金曜日の午後一時から五時まで事務の小野さんが勤務しております。付近にお越しになることがありましたら、是非お立ち寄り下さい。 会員の皆様のご健勝と一層のご発展をお祈り申し上げます。 (一同)